

ストの爲に動かんを欲すわれらは嘗て母の祖先の住居せしウ
リに於けるパークレーの舊跡を尋ねしが實に桑海の變化あ
りき。

九月十三日ホーウ井ツク われと今遠き旅路の中に在るがわ
れらの生涯もまた恰も長き旅行の如く夕に至れを旅亭に投じ
て終日の疲れを癒すことを得るも朝にそ再び旅路に上ぼら
ざる可らずわれ身のすぎにし方を顧みるに歴々安慰と休息を
與へらるゝも暫時にしてまた出發せざるを得ざりきわれらは
首尾よくアバーヂーンを去りエヂンボローに至りて更に働き
を初め週の第七日目にロルド、ブラボスト及他の貴人と共に所
々の監獄を訪ひ大に利益を得たり週の第一日の朝われらは集
會に臨みしが極めて盛會にして友會徒ならざるもの多く來り
夜に入りてはなほ大なる集會ありて初めは其成行きを氣遣ひ

一が幸にして神の恩恵によりて好結果を得たりわれらの出立
せし朝なりしが殆ど十七人の貴女紳士にわれらと共に朝登を
喫し中には久しく高名を慕ひしサー、ヂョルヂ、グレイ夫人等も
ありて食事終るやアレキサンダー、クルイックシヤンド氏ハ聖
書を朗讀しわれ跪きて祈禱せしが皆其愛心と神の前に一なる
靈魂とによりて一團結とせられしが如く思はれきわれらは其
夕グラスガウに若し翌日監獄所を巡見し一の婦人會を組織し
ぬ、其翌日の事なりしがわれらと數家を訪問せし後有力家地方
官等と共に再びプライドウエルの監獄に至り婦人會をして運
動に着手せしめたり其時われらわが友會徒の習俗を知らざる
人々の面前にて跪きて神の恩恵を乞はざるを得ざるゆへ大
に心苦しく感ぜしが幸にして真理の力は万事を支配し然れど
も悪鬼の爾等に服ししことは喜とする勿れ爾等が名の天に録

されしを喜とすべし」なる語ハわが胸に浮びぬ、われらは其處にて都合二回の會を催し一と朝にして友會徒の爲ありしが他の人も來り一は夕にして全く公衆の爲なりしが幸にして好結果を生じ快くグラスガウを去るを得たり、われらは其後カムペーランドの各所を巡歴し數多の會に臨み時々生靈の感化をうけてケンダルに趣きぬ。

われらが次ぎに臨みしとリバープールの會にして他の所に於けるが如く公會なりき、われは初め之を憂ひしが幸にして天の助けを被ふり心ハ平靜となり神の眞理を堂内を治めたまへり、われらは後ちペンソン氏の家を訪ふて暫時懇談しリバープールのを去りてノースレーに赴きダービー夫人より切に招待せられしとぬダービー伯の邸を訪ひしに非常の歡迎をうけ今迄宿り來りし小舎にひきかへて廣大なる殿中に泊るを得われはま

すく、謙讓の念をまゝぬ、

「二十四日ノースレー 神よ今此家族は宗教を求めんとす、願くはわれらと共に在まし聖靈をもて不肖なるわれらをたすけ爾の服役をなすにさへしめ、爾の聖なる名を稱ふるの力をわれらの口に與へたまへ、爾は能く此婢が身の上を知り給ふ、願くは其弱きをたすけ其罪を清めて爾を稱讚し奉るの榮を與へ人を御手イエス、キリストに導くの力を下しとませらんことを」

「二十六日シユフフィールド 右の日記を書き終りてわれハ食堂に招かれ家族の數を大凡百人もありてわが兄弟は約翰傳三章を讀み暫時皆沈黙せしがわれも忽ち感づて跪き家の爲また家族の爲に恩恵を乞ひ、其上に下しとまひし神の憐恤殊に其艱苦に踏りしとき全能の手を之に加へたまひしことを感謝しければ皆深く敬虔の念を起しシヨセフをまづ立上かりわれも

之につゞきしが家族の者は皆涙を流し或者ハ非常の感觸を起せり、次でジョセフは跪きて熱心に祈り大に神の助けをうけて立ち上りしむ其時われと教主の「わが弟子なるをもて小き一人の者に冷かなる水一杯にても飲する者は誠に爾曹に告げん必も其報賞を失え」といへる語を思ひ出で之を語りて家族及僕婢等の親切を謝して其場を去りしが此時われらの上に加はりし能力を極めて大にして恰もジョーン、リチャードソンの日記中に在るが如く決してわれらの働きにあらずして全く驚くべき神の所爲なりしあり、

ヂエー、ヂエー、ガーチー及其妹と北地旅行中各所の監獄を巡見せしが皆驚くべき不整理にして囚徒ハ或は困苦に沈み或は殘酷なる處置を被りしゆヘエリサベス、フライの柔和なる心への非常なる刺戟を與へたり、されど彼をして最も同情の念に堪へ

ざらしめ終生記憶に存して常に其感情に影響せしものは數ヶ所の獄舎中に居りし發狂人ありき、
 兩人は其見聞せしところを監獄巡見記と云へる雜書に記して世に公にせしが監獄改良家には大に好材料となり、之を一讀せし者は皆其慘憺ある有様には深く悲痛せしも遠からずして改良せらるべきを思ひ此書の發行せられしは則ち進歩の第一階段なるを信じて心私かに喜ぶざるをなかりき
 エリサベスの言は至る所に聽かれ其訴ふる所は直ちに受納れられたり、ガーチー氏は其北地旅行日記中に記して云へらく「エリサベス、フライは其事業をなすに非常なる妙を得如何なる反對起り來るも之を和らげ如何なる政黨をも説き服して能く其困難に打勝てり」と今ま此言の虚ならざるを証せんがためエリサベス、フライと共にグラスガウの監獄を訪ひし蘇國婦人の書

簡を掲げん、

「フライ婦人はわが囚徒の不規律ふるを見書を地方官に寄せて面談を乞ひ今夕にフライドウエルにて数人の婦人に會ひ簡單にニユゲートの改良事業の状況を語り終りて各婦人と暫時懇談し遂に女囚徒にも談話せんといひければ皆之を喜ぶざるえなかりき但しフライドウエルの監獄刑罰之を危ぶみ女囚徒は壓制を以てするにあらざれを會て聖書朗讀に耳を傾けしこさなく且つ之に類するものは皆口を極めて嘲弄せしよしを語りしがフライ夫人を之に對ふるに素より自分とても危まざるにあらざれども之を試むるは強ち不利益にもあらざるべしと信ずる旨を以てせり是に於て百人許の女囚徒ハ一室に集められわれらは狐疑と心配を懷きて之に入りしがフライ夫人は帽を脱して女

囚徒の前なる低き席につき溫和なる目を放つて之を見渡し「われわれらの此地に來りし目的を一言するを可なりと信ば」と發言し幾多の墮落女の爲に盡力せしこさ及之を惡より救ひ出しと手段等を語りしが其語ハ殆ど聖書の語の如く常に救主の約束を引きて女囚徒等を勵すに神聖なる望を以てせり次に夫人は「御身等は不正を避けんとはせられざるか御身等は貴婦人の歴來りて慰めの語をかつたり御身等を善に導かんさせらるゝを好まざるか思ふに御身等は必ず其悲痛を貴婦人等に語り之を慰まらるゝの方を問はるゝならん蓋し惡事を働きたし人は多くの憂愁を懷けばなり」といひて彼等の爲にも盡力すべき旨を語り規則を讀上げ「もし同意ならば手を舉ぐべし」といひければ一人として舉手せざるはなく夫人の再び口を開いて語らんとする

や皆感涙を其眼に浮べわが傍に居りし一少女の如きと目
 は涙を以て溢れ唇は夫人の言と共に動き又手に聖書を携
 へし一老女の如きと感動極まれを覺えず拍手せし如き有
 様にて頑項不遜ある女囚徒等は皆翕然さして夫人の意に
 従へり、次に夫人の聖書を開きて失ひし羊銀徽枚放蕩息
 子等の書翰を讀めり、
 われハ筆拙くして夫人の神聖なる朗讀が如何なる結果を
 及ぼし、かを悉く記する能はず、夫人は管に流麗なる音聲
 と未と嘗て聞かざりし動作とによりて各書翰に趣味を興
 へしのみならず屢々讀み止まりて女囚徒の上に白眼を如
 へ、特に「尙ほほく在しに其父彼を見て」といへる語に力を入
 れて朗讀し終りて徐うに聖書を下に置き跪きて女囚徒の
 爲に祈れり其祈禱は實に肺肝より出で其聲を恰も母の聲

路加傳
 十五〇二
 十、

める子の爲にいのれるが如くなりき、
 グラスガウの獄舎にては其結果はフライドウエルに於け
 ること異にして或者は驚愕し或者は聽つざらんとし或者
 は夫人の助けを受けんことを願へり、而して夫人が職業を
 獄舎に入るゝの可なるを説くや多くの囚徒と昔之を喜び
 しに獨り下婢と思ほしき一老女ハ「否更に其要なし」と答へ
 しが忽ちにして後悔し涙を茶褐色の面上に流して其無禮
 を謝せり、

エリサベス、フライの身は其劇務に堪へ兼て大に健康を嘗ひし
 かば家人朋友等の勧めにより數週の間をサセックス州に居り
 重もにフライトンにて其病を養へり、
 氣力の稍々復せしときエリサベス、フライハ左の如く記せり、
 「四月八日フライトン われはまた會に臨むを得て週の第一日

及第三日には通常の會に出で第四日に四季會の第一會及月
 次會に連りしが他教會の人々相會せしめ大に心を爽快に
 なしぬ、神を今其限りなき憐愍をもてわが衰弱せし身に氣力を
 與へ再びイスラエル人の牧者の爲に働かぬんこと近頃わが
 非常の闘争を心に懐きしにもかゝらす一事一物としてわれ
 を刺撃しわれを勵まし奮て主の爲に奔走せしめざるはなくわ
 が心を「さへ彼はわれを殺すもわれは彼に信任せん」と叫び恐
 るべき暴風雨は止みて驚くべき静和の日光へわれを照すが如
 し思ふにわれは一の功なくして斯かる恩恵を受け心には平安
 を得人生の憂愁を遠くわが目を去りて之を見んさだにする能
 ざるに至る、ア、また何の幸を而してこは全く此の不肖の子
 にかはり神の攝理の致す所なり誰か其慈仁に感ぜざらん、ア
 、神よ若し不幸にして他日われを試みの中に沈めたまふ必

十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

のあらば願くはまが靈の敵に對ふて旗を擧げわれを以て敵に
 抗するの勢力を有せしめもいわゆる力の盡くるに至らば願くは
 助けを下だしとまへ、ア、恩恵深き神よ爾はわが救主となり
 鎖を斷ちてわれを獄中より救ひ世に敵の手に渡たさざるのみ
 ならず常々恩澤に沐浴せしめわが恐怖を去りわが行路を守り
 わが口に與ふるに爾を讚美し奉る歌を以てしたまへり、われは
 今熱情を奮つて之を感謝し奉る幸に耳を傾け給へ「アーメン、
 エリサベス、フライはブライトンに滞在せし中ニユージェートの
 女囚徒より數通の懇切なる書簡を送られ大に其心を慰めしこ
 とありしが其返信に云はく、

「ニユージェートの女囚徒特に其將に故郷を去りて再び歸る
 能はざらんことを人々にをくる、
 神は病氣によりわれをして暫時御身等と見なすも異にせしむ

るもわれを決して御身等の事を忘れざるなり、思ふに御身等の多くを或は誘惑に逢ひ或は苦悶に沈みわれらの憐憫を乞ふならんかわれらが最も氣の毒に堪へざるを御身等の餘り弱くして誘惑にあへば忽ち惡に陥り靈の敵に全身を洩すこと是なり、勿論御身等の位置は悲むべきに相違なしされど決して失望するなかれもし其罪を悔ひ其誤の道より歸り神と共に住まんと欲せむ尙ほ大なる望あるなり、聖書に云く「キリスト、イエス罪人を救はんために世に臨れり」と又云はく「彼は己を頼て神に就る者に懇求んとして恒に生れを彼等を全く救ひ得るなり」とさればわれは御身等に勸む早くキリストに來り赤心をもて神を求め全身を委て神に奉ぜよと蓋し神を御身等の願を一々知らざるはなく御身等を受納れて其背教の病を醫せんこと給へばなり、

提摩太前書

一〇十五

希伯來書

七〇二十五

抑も神と罪人の友といはるゝ御方なればもこれを受び其命に従ふときに何人を問はず必ず忠實なる朋友となり、其迷路に陥りしを救ひ神の正路に導き給ふや明なり又御身等の故舊息子の譬喩を記憶せらるゝならん、彼の息子は未だ遙かなりしに父は之を見て憐憫に堪へず行きて之に遇ひしにあらすや、されば御身等の中にたさへ善を距ること遙なるものありとするも若し之に歸らんと欲せば神を必ず喜で之を迎へ豫想ざりし大なる憐憫を御身等に加ふるならん、われは實に御身等を愛し御身等の早く心よりして神を求め其德行をもて直に神を愛し罪を悔ゆるの證となすに至らんことを懇望するを嘗て御身等の爲のみならず、之を遠くしては世人の爲之を近くしては御身等の爲に盡力せんとするわれら自身の爲なればなり、われは過日御

身等の中に起りし騒動につきて大に心配せしが其共働者
 中より雷簡を受取りて大に安心し今は彼等の罪を全く問
 はざらんさ欲すわれらは熱心に御身等に願ふ以後はたご
 へ如何なる誘ひに遇ふも決して斯かることを働く勿れ何
 となれを其害は皆に御身等に止まらずして廣く天下の囚
 徒に及び御身等の敵をいてわれらが親切は遂に無になれ
 り最早何人にも彼等が爲を計らざらしめんとすと云はしむ
 るに至れをなり終に臨みて尙一言せんわが病勢も此頃
 大に静まりたれば遠からずして相見ること望なきにあらず
 われば成るべく流罪人の出立前に行かんを欲すれども若
 し間に合さざれば偏に神の恩惠の彼等に加はり海上慈な
 くして彼地に安着せんことを祈るまゝわれらは常に御身
 等の爲を苦慮せるがゆへ御身等の善信を耳にするほど喜

さしきはなしされたとへわれ不幸にして再び御身等と
 相見ること能はざるも御身等に云はざる可からざることを二つ
 あり一は飲酒に耽ることにして一は男子と交り交るこ
 と是より思ふに婦人の墮落する者は殆ど皆此二事に基せ
 ざるはなし願くは深く之を注意し常に謹慎にしてキリス
 ト教の徳を修めよこれ御身等の親友なるわか懸望なり、
 フライトンニ於て

千八百十九年四月四日 エリサベス、フライ

ニユーゲート教員事業は極めて多忙なる務めなりしにも拘は
 らずエリサベス、フライは之に妨げられずして能く他の慈善事
 業にも力を盡せり其一は即ち家屋を有せざる貧人の爲に宿舎
 所を設けしこと是なり千八百十九年の冬より千八百二十年に
 かけて非常なる嚴寒にして家屋を有ざる流浪人の困苦は實

甚しく殊一少年の宿を借らんがため數錢の値を家々に乞へとも何人も之を顧みるものなく遂に空しく其命を戶外に絶ちしを見しかばエリサベス、フライの慈愛心は抑へんとするも抑ふる能はず直ちに一の救濟所を起し火を焚きて室を温め瘦室をつくりて安眠に供し管にパンを與ふるのみならず朝夕を肉汁をも併せて給與せりまた種々手を盡して避難者の爲に職業をも求めしが世人も皆其義氣に感づて之を助け毎夜數百人の貧民を宿泊せしめ其他室狭くして救濟所に入る能はざる人々に衣食を給して他に宿泊すべきの道を與へけり但し婦人を
 エリサベス、フライ其長となして専ら婦人會の救助すること
 になれり、

なすと猶ほ朋友に對して胸襟を開くがごとし云ひしが誠にゆへあるなり、千八百二十一年彼を左の如く記載せり、
 「われは此日記を書き終るに臨みわが被れる幾多の恩惠の中、自然、花卉甲殻等の美を意のまゝ、樂しむの恩惠の如何に大なるかを云はざるべからず、われは此等の物を天のたまもの、如く思ひ之を樂むの能力をなほ大なる恩惠と感するなり、とさへわが心は如何に他事に轉下わが情は如何に他物に移りしとさきとて一旦兒女等と之に向へば其爽快なること決して兒女等とをさらす、それふがら往々疑惑を堪へざることあり、わが之を記載する人もし時と心を高尚なる義務に供せざる其受くべき有形の快樂と音に其興味を失はざるのみならず抑りて大なる趣味を添ふる者なることを知らしめんが爲なり、」
 ニューゲートの婦人會へ其初めて組織せられしより三年を經

通信委員を置き報告通信等をなさしめたり、此時に至りては已に各地に数多の婦人会も起り且つ有志家の聯合矯風事業も盡力するものも数多ありしが其收めし結果は未だ僅少にして刑囚徒の區別を立て不満足ながら職業を興へ幾分か獄内の悪習を直せしにすぎず、エリサベス、フライの目的を達せんには尙ほ幾多の爲さざる可らざるにあり、即ち囚徒の區別をなほ正しくし監督を嚴にし常に職業に従事せしめ、教育を興へ宗教を傳ふる等も囚徒の風習を矯正するに最も必要なりしが之を實行するには尙廣大にして嚴正なる管理を受くる監獄を要せり、是に於てエリサベス、フライは國中の重なる監獄を巡見せんがため賈人及二長女と共に此年九月を以て漫遊の路に上り、彼は兼て巡見せんとする監獄の長官に宛たる紹介書を其知れる官吏又親友に貰ひ之を携へて各地に至り獄吏地方官有志家

等と共に獄舎に入り各室を巡りて一々囚徒の實状を巡視し詳き質問を獄監獄僕に掛け如何なる修繕の建物に必要あるかを計算し見聞の結果をを書簡に認めて其地の知事に報するを常とせり、其他エリサベスハ或る婦人会を興して女囚徒の矯正に盡力せしめ或ハ望ある婦人に托して獄舎に傳道せしめしが彼が意見に至る所に用ひられ其起し、事業は皆好結果を生ぜり、エリサベス、フライハ此旅行により多の經驗と新知識を得しを以て大に獄舎法の問題に精通し且つます、之が爲に奔走するの熱心を増すに至れり、エリサベスがノーフォークより歸りしより間もなくして重罪問題を世の注意を喚起し人々互に異説を吐きて相論難するに至り獄舎法改正會、少年囚徒改良會等も起りて頻りに奔走し且つ數人の有力家も之に加りて婦人会の助力をなすければエリ

サベスハ今やわが力を奮ふべき時節は到来せり此機失ふべからずとや思ひけん或は口を以て或は筆を以て獄舎法に關する意見を見せ世に公せり勿論彼もニユーゲートに於ける改良策は擧げて國中の獄舎に施すことを得べしと思はず又政府の施行せる治罪法を其精神より全く一變せざれば決して永續すべき好結果を收むる能はずと考へざりしが宗教家にあらざれを獄舎病院等を訪ひ又他の公共事業に奔走するが如き慈善的の務には適せざるとを深く心に憤り嘗て女囚徒矯正事業に於て政府の保護を受くるの必要を論ぜし書簡中に於て左の如くいへり、

「思ふに數人の私人に托せんよりは政府の權威を藉りて之を實施すれば其勢ハ少くして却て女囚徒の惡習を正し其徳を進むるの力は大ならん蓋し私人なる者と生命財產を

云ふに及ぼす其他何事も意の如くあらざるを以てなり一エリサベス、フライハ少しも空想に走らばして非常に觀察力に富み一人にして世人が是迄更に其境遇を顧ず如何なる弊風行はるゝも之に注目せざるを見て慈善家の必起りて世の有様を一變すべきことを豫想せしが案に違はばして今は世人も漸く矯風事業に注意するに至れり勿論不完全なる人間が不完全なる知識を以て爲すことなれど幾多の失敗に陥り無數の過誤を犯し、は云ふに及ばざれども其利益を實に悔る可らざる者あり一なり而してキリスト教の宣傳へられし處には何處を問はず必ず平和と慈悲とが人間を支配せしを以てエリサベスは眞理の光の始て東天を照すを認め一般人民をして其恩澤を被らしむるには教育を盛にして普く聖書を讀しむるの必用を感じるに至れり、

「千八百二十二年六月十三日ブラシエット 去る十日午前六時
 デロセフが妻ジェーンはアールハムにて死去しデロセフは偏
 に之を神意に任せ心静に葬車を營むを得しこの報知あり、思ふ
 に厚き天祐は彼等兩人の上に加りジェーンを病床にありしを
 数日なれども能く永眠の覺悟をなせり、彼は謙遜にして神を敬
 愛し常に身の行を慎み實に良妻賢母孝女にして貧民に取りて
 ることよなき好友なりき、」

「八月二十日 昨日ハマレらが結婚日なりしが指を屈すれを結
 婚後己に二十二年さばありぬ、此間わが受け一變遷は一々擧げ
 難く或は天に上げられ或は地に投げられ或は深淵を越へ或は
 大洋を横ざり、健全なるときあり病身なるときあり、或時は富の
 樂を味ひ或時は貧の苦みを嘗め、時としては云ふ可らざる神の
 恩寵を被り時としてハ悲愁の淵底に沈み、嬰兒を擧げて喜に堪

へざることあり、愛子を失ひて悲に忍びざることあり、家族團圓
 の樂き日あり親子別居の憂き月あり、之を思ひ彼を想へどまが
 心は實に破れんとするなり、」

「十一月七日ブラシエット われらに加そりし天恩の厚きは實
 に言辭をもて表はす能はず、去月三十日の夜目が心と大に惱み
 如何なる慰も其効なく深く落膽と恐怖との中に沈みしが忽ち
 神に清めらるゝ必要を感じて主の杯に口を開れしのは心中
 の争鬭漸々に静り喜悅と信仰と愛とが全身に充つるに至れり、
 是に於てわれは聖書を讀み、眞人子女愛妹、ガース、サザン、ピッ
 チ、オールド及數人の家婢と共に跪きて熱心なる祈禱をさしげ、
 殊にラケルと自身とが苦痛に陥りしとき天の助を下さんこと
 を祈り、奇なる哉未だ二十四時ならずしてラケルとわれと
 は各嬰兒を安産しぬ、」

「十二月十四日 己れは昨日ロンドンに赴きニユーゲートを訪
 ひ囚徒婦人會員等に非常に歓迎せられぬ時にわが心ハ大に爽
 快にしてわれらが始めし事業を全くわれらの事業からずして
 神の成させ給ふ御所爲なるを感し偏にわれらの船の上に神の
 恩恵の下らんこそを祈れり、思ふに若し神にして彼の事業に働
 ける人々を恵み其務をつとくることを許し給とされれば決して
 獄中に繋結れし罪惡を洗清むる能とざるあり、」
 千八百十八年マリア號が波航せし以後ハ毎年四回づ、押入監
 送船の出帆ありしかるエリサベス、フライハ之が爲に非常に盛
 力して罪人等の便を圖れり、又此事業に助力せし者も數多あり
 しが既中エリサベス、フライオルは最も興て力ありき、彼ハ千八
 百四十一年を以て遂に病死せしが其年迄毅しく行きて實況を
 探らざりしは僅に一船のアムロトライト號ありりのみにて常

に能く熱心なる働きをなせり、まれき時々之が爲に色々の苦辛
 を受けしは云ふに及ばず殊に海上にて危難に遭ひとは度々に
 して或る時の如きエリサベス、フライオル及エリサベス、フラ
 イの兩人は將に一命を失はんとせしが幸にマルサンの教ふ
 ところとなれり、同氏の書簡に云く、

千八百二十一年の夏炎威絶くが如き日余は海船イーゲル
 號を指揮してヴロトリ、號及フェオリット號とサーミス
 河にて競走し之を乗り越さんせしことありしが船の出
 づるや間もなくして急よ一天曇の如くかき曇り雷鳴甚し
 く劇雨盆を傾けて來り、加ふるに北風極めて強かりけるが
 余は船に立ちわが船の他の船を越へ強風に逆ふて走るを
 見體に競走船に追附くを得べしと思ひ心切かに樂み居り
 しがパーフリートより二里ばかり下に至るや強風と海潮

さに妨げられて一歩も進む能はざる小舟を見た時、中に友
 會徒の装なふしたる二人の婦人あり全身雨に濡ひて非常
 に窮せるが如くなり、余も當時今とは異りて無頓着なる
 水夫なりしが、苟かに友會徒の溫和なる舉動には感に折々
 其乗客よりし者と語りて益々之を尊敬せり、尤も余は一度
 は若し船を止むればわが競走も無効に歸し、乗客も大に失
 望すべしと思ひしが、さりさて止まらざれば彼の二婦人
 を如何せんと思ひ直ち機師に耳語して副船長を以て船
 を小舟の方に寄せしめ、たき旨を語り乗客の未だ舟の止り
 の止を氣付さる中に二婦人を救ふて船に上げせし小舟を船
 の尾に附けて再びアムス河を飛ぶが如くに上れり、余は深
 く此二人を魔裡に記してゐる、能はず殊に余が終りに扶
 け上げし一人ハ已に船に上げりて余に向ひ船長とわれり

は全く御身の親切にて救はれたる實に感謝の念に堪へば、われら
 は幾度か手巾を振りて他の荷船に救を求めしも未だ御身
 の船に乞はざりしハ其望なきを恐れしゆへあり云ふも
 尚ほ余が手を放さざりき余は其危難を看過す能はざりし
 旨を對へ直ちに給仕女を召し婦人室に案内して休息せし
 めしが二人とも外套を被り居りしとめ豫想せし程の害ハ
 受けざりしなり、
 已にして雨止みければ二婦人は再び甲板に上り來り一
 人はフライ夫人にて一機會をも空しく失せず余が乗組員
 の大に迷惑さうに見へ或者は斜眼を余に注ぎて余が精否
 を見んとするにも拘はらず雜書を出して之に與へけり、勿
 論當時余も宗教を好まざりしとはいへ、誰人かよく斯かる
 天女の如き婦人の優しき勸めを拒むを得ん其舉動を見て

二四十六
慕はざるものは人にあらざるなり、其脱教を聽きて天女が
世の悪を去りて救主の限りなき愛を求むべきことを教ふ
るが如く感ぜざる者も亦人にあらざるなり、實に婦人の美
質は一として具はらざるはなく之れを照すに身も悪も神
の服役にさゝぐる慈善心の輝ける光を以てし余をして彼
が慈善事業の成功すると全く之が爲なりと思はしめたり、
フライ夫人は同行フライオル夫人と共に女囚徒の流さる
を送りてグレイアセントに至りし路路なりしこと及び
其事業の實況を語りし余を大に感ず以てはもと余が力
にして及む如何なる扶助なりとも爲さんと思へり、フラ
イ夫人と決して余を忘れ余が近隣に来る毎に必ず余が
家を訪問し生涯親しく交通せしが年老ひ身を弱るも其精
神は少とも屈せず常に慈善事業に奔走せり、余が此世

に於てフライ夫人と交るを得しはまゝ何の名譽ぞや願く
そ來世に於ても夫人と共に救ひの中に入らんことを、
ラムスグートにて

千八百四十七年二月 ケービーマルチン

人... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百

第七章 自千八百二十四年

解放せられたる女囚徒の救済所或は養育所の必要ハエリサベ
ス及其共役者等の注意を惹く所なり千八百二十二年救済所を
ロンドン府にて最も人家稠密なるウエストミンスターに設け
赦免せられし囚徒にして後來最も有望と認めらるるもののみ
入ることを許せり抑も此處へ委員の一名カロリン、ニーヴとい
へる貴婦人の仁恵にかゝるものとしてかくかれがりの時間と
財寶をこの目的に抛つに至りしは蓋しエリサベスと同車せし
ときの談話に基きしことにて後ニーヴ自から人に語りて曰は
く「ある朝のことなりきわれフライ夫人と同伴して遊に出でし
がわれ甚だよわよわといへ何ぞか善き道の爲めにわが力を
添へんものと決心せり、うの時わが目に印して今に忘るゝ能ハ
ざるものは即ちわれ往々有望なる小女の一度罪を犯せやまず

まず罪科を重れて遂に獄裡に終るに至るを見るも、しつこくわ
 かき罪人の爲め避避所ありしならばわれらは此事業に當りか
 くも大なる苦痛を感じざりしものを「言ひしエリサベスの顔
 色も赤心を表はしと奇異なる音聞となり、このとゞ一回の談話
 を遂にわれらが罪人救済所の基礎となりぬ」と、
 却て該救済所に入りしは最初唯四名のみなりしが千八百二十
 四年に至りて九名に増加しなほますます増加して數年の後に
 五十六名の若き婦女を容るゝに至れり、
 友會徒の婦人等が事業はここに止まらずしてロンドン市中到る
 ところに散在せる邪惡にして教育なき少女等をまよりの注意
 を惹けり、彼等を幼時より已に囚人となり又は囚人とならざる
 も孰れも罪惡に染みて其家にては勿論改心の機會絶てあるこ
 となく通常の罪人救済所に容れて矯正せんとするも若きに過

ぎて其功よく實に憐むべき情態なりき、さるほどに彼の婦人等
 の救済所を建てし後一年あらずしてかゝる少女等の爲めに一
 の學校をチエムシーに開きかれらなりの憐むべき境遇より濟
 ひ出だし規律ある有徳なる婦人に養成せり、この企圖はエリサ
 ベス、フライが嘗てニューゲートにて其友と年少なる罪人の處
 置甚だ困難なることを語れるとき初めて其心に浮びしところ
 なりき、

「五月十八日ブライトン わが一行は、今夕この地に着せり、わが
 身体は舊により未だ快からず、さてわがこのところに来ること
 となりしはわが健康ます、我へが爲めにしてわが夫及其
 他の人も共に來りしが親愛なる小兒等を連れざりしはわが大
 遺憾を感ずるところまた年會に集まれる親愛ある友會徒等を
 後にせしをも深く悲む所なり、雖もわがこゝに來りしは正し

く義に解ひしことと信す、故にわれはわれらを保存して之を守り給ふ只獨なる神に全身を任せんと欲す、思ふにもし聖旨にかなはゞよくわれを全快ならしめわが心をして感謝するを得せしむるならん、」

「二十三日週の第一日、われ今日もまた會へ出席せざりき、これ會に連るにさへざるほど衰弱してなれをなり、中略われ今朝も身体よわりて獨り靜かに坐り常の如く禮拜會の事を想出で何れの宗派に属するにも拘はらず凡うキリストの教會に属するものは皆相愛してよく一致和合を深く感ぜり、人には靈の交通なるものあれば肉体は相離れ感情は相異なるもわれらよく注意して神に侍べるときには決して相互の交通を遮断せらるゝものにあらず、且つ特に生ける教會に連れる多くの信徒にして熱心に神に拜侍するときは、われらが主イエス、キリストを通して

其勢力を會に臨まざるものにまでも及ぼし得るものなるを信す、」
「フライトン滞在中エリサベス、フワイは救恤を求むる者より大にわすらはされしが彼等の中には市街を徘徊して通行人又は馬車などの後につけてかまびすしくあはれみを乞ふ眞の乞食のみにあらずして一家を持てる貧民すらありき、思ふにかくの如きものに對して眞に貧困にして恤むべきものなるか或はうの云ふところ詐欺なるかもし眞に然させざるは已む懶惰より起りしか或る不運にして已むを得ずこの不幸に陥りしかを知ること甚だ困難ありしならん、」
「フライトンころ眞に地方訪問會を鼓舞するの地なりと見ゆ、この地に於ては慈善の感情全く行はれざるにはあらず且つ頗る富饒なる土地柄なるも前者は其方針を失し後者は之れが用法を誤れりプロヴィデント、ソサエチー(貯蓄銀行)の設あり

て數年間已に其業をされりし雖も僅に弊害の一小部分を救済するに止まるのみ、其持説に於て相反せる人々を結合して同一の目的を達せしめんことを、このことほど困難なるものはあらざるべし、特に宗教上の事に於て然りしす、されどもこの目的を達せんにも同心協力なくんば到底成就することを得るものにあらず、
 又は最初少し躊躇せしが漸く勇氣を鼓して盡力一途にブライ
 トン地方會なるものを起すことを得たり、抑もこの會の企圖するところを親しく貧民の住居を訪問して其勤勉と節儉とを奨励し或は疾病其他の原因より起りし真正の困難を救ひ乞食と欺騙の所業とを棄ぎ、蓄貯銀行の制度に倣ひ彼等をして僅少の金額を日々に貯へしめ他日必要の時に應ぜしむること等是なり、この目的を實行せんが爲に會員は親しく家々を廻りて其事

業の實狀及性質を探ぐれり、かくして後來のために日々に微少の金額を貯ふることは貧民にありてもいと容易のことにてかつこれによりて彼等はますます勤儉の習慣を得たり、また婦人等の親しく彼等を訪問せしは極めて好結果を齎し訪問せらるゝ者には秩序を守り清潔を保つの風習を興へ訪問者の心にはますゝ懇親の情を起さしめ互に好意をもて相交るに至れり、
 エリサベス、フライはブライトンにあるとき疾病によりて衰弱し毎夜曉に至るまで苦痛を受け、ればしばゝ窓の側に至りて新鮮なる空氣を呼吸せしことありしが夏の穩なる晩にも秋の暴風怒號するの空にも常にかれが眼界に一の生物あらわれけり、これ即ち寂莫たる砂礫の濱邊を徘徊する封港監守人なり、さかれハ初めエリサベスの注意を惹きしが遂に其同情を喚起

するに至れり、蓋しこの職務は尤も危険且甚だ困難なるものにして、之れを任ずるものは其官位の尊卑を問はず幾多の艱苦を受けざるべからず、特に其屯所は容易に近よりうべからざる處にあるのみならず、職務の性質として人民との交通は絶たれ人々の嫌惡するところとなり、夜毎の警衛の爲めに断へず疲勞しまた猛烈なる天氣或は密商との争闘によりて危険に逢ふことと云ふなれば、彼等は自らが封されたる風情なりと云ふも過言にはあらざるべし、さればエーサペスはいかにもして彼等が道徳上及宗教上にも幾分なりとも利益を與へんものと思ふ所し、折柄其近傍なる數ヶ所の屯所を總轄せる副隊長も其意を賛成せりと聞き、勇氣を得遂に兼て期せるところをなすに至りぬ、さてよく封港の性質と組織とを考ふれば、唯な一うべきことは聖書及其他の有益なる雜書を彼等に分布することあるのみ、依

てエリサペスはこの目的を達せんために書を聖書會社に送りて雜書の廻送を請ひしか、書記の一名なるスタインコンツ博士より左の如き懇篤なる返書を得たり、

「我敬愛なる友よ、

懇篤なる貴翰は到來せり、直ちにアール街に會せる大英國及外國聖書會社出版委員支會に其趣を通知しければ、該會ハ五十卷の聖書と二十五卷の新約全書をプライトン支社に送り、貴姉に托して封港監守人等に分配することと決せり、勿論われらは無代價にて聖書を分配するよりハ低價にて之を販賣するを利益ありと認むれども、前に記せる人々は特別なる事情あることなれば、たゞへ無代價にて分與せらるゝも一に貴姉の隨意になしとまふべし、」

千八百二十四年七月十二日 サウワイにて」

この書籍分配の事は眞によくエリサベスに適し之れによりて
 フライトン近傍に屯し監守人等と益々親しき交際を結びしかば
 監守人等は皆水夫の本色なる質素と熱心とを以て之が盡力に
 對へ數月の後には其利益は大に現れて未頼もしくなれり、
 千八百二十八年五月その女リチエンダはフォースター、レイノ
 ールズに嫁せり後二日エリサベスは之を記して曰はく、
 「昨日を以て婚姻の式を舉げしが嚴肅にして満足なる會なり
 き、新郎新婦さもこの言語の云ひさまいと麗はしくして頗る感
 動せしが如く見へけり、わが親愛なるジヨセフ其他の人々は彼
 等の爲め、祈禱を捧げわれは會の終に當りて彼等二人の爲め
 ます他の年少き人々の爲め及びなほ年すゝみとる我等のため
 にも熱心を以て祈り夫より短き殿なる默禱の後結婚契約書を

出して之れを讀み且つ之に關印せり、この翌朝われらわが子
 女等さとのしく聖書を讀みぬ、
 在天の父に感謝すべきなりわれは當日こそ眞正の嚴肅と眞正
 の喜悅を以て充たされけれ、これ通常の日にあらす何事にも秩
 序あり心安靜にして愉快備はらざるなく、餐食の後われかく大
 なる恩寵を神に感謝し共にありしものは僅かなりしもわれら
 は幾多の救を経験せしとを感下靈魂にも肉体にも共に高く水
 面上に頭を出しつゝある想をなしてこの悦ばしき日を祝する
 を得たりき、また其夕は皆集まりて凡て善きものと祝福との海
 にのみにきすべき讚美を神にささげたり、
 其夕女の一人エリサベスに語れる際談偶々彼等を圍める繁榮の
 ことと及びけれわれ答へてわれかれて卿等に云ふ如く大なる
 外形の繁榮の後には往々試探のあるものなり、さらや古き俚

跡にも、

喜悅最も大なる時にそ
悲哀最も近きにあり、

さあるなりといひしが實に其言の如くにして後直ちに當日さ
引かへ悲むべき事件の起りしころ奇異なれ、
暫時にしてうの僕の上に苦き杯の來るを許せしは神の聖旨な
りしが神はまた之れにうの杯を飲むの勇氣と恩恵とをあへとへ
給へり、此頃過く一商社の失敗せしことありけるがエリサベスの
夫は親しく其業務に執掌せずとはいへこれが株主の一人な
りしかばこれがために非常なる損失を蒙り悲嘆と困難とを其
家族に來たしエリサベスが晩年を常に煩へすことゝありたり、
かく突然の襲撃にエリサベスも頗る動搖して見へけるが其兒
りし杖は堅く支へて遂に倒れしめられざりき、

「千八百二十八年十一月二十五日 われしをく靈の悲嘆に沈
まんさせしかど他人の苦痛を思ふほどに己の苦痛を感ふ
ることなし尤も万事もみな艱苦を以て充滿するを見るときそ
これをゆるせる全能者の不可思議なる攝理を觀して何故なれ
ば主よ爾を愛し爾を信し爾の名を恐るゝものにかくなし給ふ
やと云へんさ欲することあり、されども又直ちに悟りてかゝる
疑問を發すると全くわが弱き爲なりと絶叫すわれ豈訓練を要
せざらんや、われ豈懲罰を受けざるを得んや、抑も神のこれらに
深き苦悶を蒙らし給ふてわれらにこの世の朽つべきものより
榮きてまそく永遠き朽ちざるものになさんとの神の奧義な
れをわれらはこれを批議すべからず唯謙遜りて心の中にわが
なすきころのものへわれに由にあらす全く爾に由るといふの
外なきのみさればわれと主が其のよしと見たまふところをわ

れになし給わんことを願ふ、願はくは主よこのいとも畏ろしき
ときに優渥なる恩恵を垂れ給ひ爾がわれをせめ給ふときわれ
をして沮喪さしむるなかれ、」

次の週の第一日に至りエリサベスの其家族は平常の如く會堂
に出席せんか否やの議起りしにかれは出席するに至當ふりこ
し固く執りて動かざりしかば遂に其夫も子女等と俱に行くこ
さとなりて例の席に着けり、暫時にしてエリサベスは強く感上
頼に涙を流して平伏し居たりしがやがて震へたる聲をあげて
「神もしわれを殺し給ふともわれなほかれを信任せん」と云ひな
ほ數語を重ねてかれを今の不幸中にありても其多福ありし時
さ少しも變らず充分の信仰と愛心をもてることを証言せり、
此に於て其友等は大ひに感上深く導かれたることを其感動流
涕全情慈愛等によりてあらはせり、

ジョセフ及エリサベスハ直ちにブラシエトを出で、當時其長
男の住居なるミルドレッズ、ユールトに往き一時其處に住むこ
とに決せしが爰にこの不幸を大に和ぐべき一事ありき、即ち昔
し彼等が祖父の所有にして父に傳せりし商業が今尙ほ存して
其家の若き人々が母の兄弟等の補助によりて之を營み且つ叔
父等の盡力を仰ぎてかなり安樂なる位置に至りしことは是なり、
エリサベス、フライは多年の間慈善事業に於ても家政に於ても
特別なる才智と勤儉さを顯はしよく其事情に應じて事を處せ
り、且つ寛大なるより先づ正義なれ、とせられが常に口にするこ
ころなるが當時の場合に於てもよくこの能力働けりを見ゆ、
さてロンドンにて過せし悲嘆の冬ハ特別に苦痛と愁慮との時
にしてエリサベスハはげしき心痛より身体益々衰耗してありき
咳嗽を患ひて不斷一室に閉居せしがその最愛なる子息ウヰリ

ヤムも過慮のため脳病に罹りて病床にあり、うの後幾許もなくして養女も亦病に罹りて危篤となり其看護に來りし友は麻疹に犯かざるゝところとなり、素々この麻疹なる疾病をかゝる數多き家族の中には特に危険なるものなれを家族等は遂にロンドン市外に送出されブラシエトにて會て住居なりし空屋に逃るゝに至り其處にて數週の間は恰も病院の如き状を呈して暮せり、

夫より六月上旬に至りアプトンレーンにてエリサハスの兄弟サムエル、ガーネーの家宅に隣れる小さくして便利なる一家に移ることを得たり、

千八百二十九年六月十日アプトン われらは漸くこの新しき住家に落付きたり、且つ家宅も庭園も頗る小さしと雖もいさ快くまた便利なれをわれ大に満足してこれを感謝するの外なき

なり、われまゝ主に於ける平安のみならず喜悅をすらめぐまれました時には萬事秩序を亂だし容易に收むべからざることあるも神をわが働きを祝しわが家を整へ給ふことを信ずもしこの世より生ぜざる平安にしてわが所有とならんにはわが居る場所の大小廣狹は意とするに足らざるなり、我が庭園は廣闊からざるもわれ狭小きものを以て満足す、詩し天然の美、人工の妙も皆わが眼界にあれば、天氣清朗なるの日グリーンウヰツチ病院の壯麗なる同公園の鬱蒼たる大河に輻湊する船舶牧場、に散在せる家蓋等も皆一日に觀るを得べければなり、されば小ききにも大なるにも靈の上にも肉の事にもひさしく喜悅の聲を擧げて主の名を讚美へざるべからざるなり、

第八章 自千八百二十九年

エリサベス、フライと緊忙なりしにも拘はらず一々年中毎日讀むべき聖書の箇所を撰び之れによりて教理を明かにし惡きをせめ曲れるをなれし義しきを教ふるに益あるやう排列せんと苦心せり、且其序文に「聖靈の能力により其中にある真理をよく實行に應用せることの緊要なるを説き、論結して曰はく「光陰は矢の如く月日に關守なれば讀者宜しく日課表の日付の下にある聖書の文句を暗誦として之を記しかく速かに過去の時日を用ゐて主の服役の爲め人間の利益の爲め永遠の用意をなすべきなり」とこの著述なるや之を發行して數千部を分配し、不若干を普く世に公にせしめ上は金殿玉樓より下は惡墜の牢獄に至るまで此書の達せざる限なからしめき、

此小冊子世に出で、多くの益をなせしことあらはれし例少

なからす次に記するはその一なり、
 この日課表出版の後兩三年のころなりき、エリサベスを赤革に
 て装束せし者を一冊其幼稚なる孫に與へしことあり、其兒は孫
 子を見んきてリン、マートへ行きけるとき之を「ポケット」に入
 れをきしに何時しか落してあらざりしかとまだ年齢もいと幼
 ければこのことをばあまり意に掛けざりしが、それにはエリサ
 ベスがてすから己より孫に與へしこと、其孫の名をも記し
 てありき、夫より一ケ年の間は何の知らせも無く過去りて殆ん
 どこの書は忘却せられしにリンより二里餘りなる寺領の二僧
 が其歴史を左の如く與へたり、この僧一日使を受けてその寺領
 より遠からぬ亂暴を以て有名なる婦人の許に行きしがこの傳
 言を頼まれし醫師は其婦人は始終診察せし人にして是迄發狂
 粗暴なりし女が全く別者に變りし由を語り御身を必ず師子が

然に變れるを見るならんこと云ひしが、眞に其言の如くにして其
 家に着するや從來言語を野郎にして舉動は粗暴なりし婦人の
 今や謙遜に忍耐に且つ安靜に其苦痛を忍びて臥し居るを見た
 り、さてこの變化の原因を尋ぬるに或る日のことなりしが其子
 は途にて一冊の日課表を拾ひこれ天の賜ものなりとよるこ
 びて持歸りけるに好奇心か又は神の其心に置き給ひし感情か
 によりて母はこれを手にとりて讀みけるが其語を皆恩恵にし
 てかれが心は大にひらけ眞の福音を受け入るゝことを得たり、
 尤も其進歩につきてはかれ自からも詳しくは知らざりしが其
 結果はたしかにありて遂に罪を見て之れを惡み誇靡の語を少
 しも發せざるに至り其死に臨むや嘗て靈魂を贖ひ主に導ける
 いと大切なる小さき本を枕の下より取出して間もなく平安と
 望むのうちに永眠せり、

千八百三十年九月エリサベス、フライエフライトンに到り安息
 日の朝開かる、友會徒の禮拜會に通りまた其夕各派の信徒の
 爲めに開かれし大會にも出席しまたブラッロー伯爵夫人と交
 はりその紹介をもてアトレイド女王に一書を奉呈すること
 得たり、其要領は日記の中にあれば左に讀むべし、
 「われも先づ國王及女王兩陛下の萬福にして神の恵によりて勵
 まされ神の聖意に從ひてうの榮光の爲めに生活せんことを祈
 り、またわが女王の爲めに願ひしところは丘の上に建てられた
 る城の如くうの光人々の前に輝き彼等をしてうの働を見て在
 天の父を崇むるに至らしめんことにしてわれはまたかれが社
 會の爲めに貧民の教育を奨励し聖書の分布を増進し誠しく安
 息日を守らしめ上等社會の其日に諸の遊樂をなすを禁じ其下
 等社會に及ぼす惡風の根源を斷絶せんことを望みうれより非

救主と死罪廢止説を少し論じ兄弟ジョセフの著せる論文
 集とわれの牢獄巡見記一冊とを女王に獻せり、
 千八百三十年十二月七日 全能の主がわれになし給へる種々
 のことをよくかきつられんと願ふこれ少くともわが最も愛す
 る子供等及其子孫を益せんことをおもへばなり、先づ愁傷の戲
 より始めんにわが愛するフタースターとリチエンダの間に設けたる
 赤兒は僅かに二三日の劇症の爲めに死去せり、死は實に恐怖し
 く人をしてこれをなもふことに戦慄せしむるものなり、われそ
 うの棺の中においてなほ艶色を失はざる麗しき赤兒の顔を見
 しとき殊にしか感ぜり、われらは所有物のたのむに足らざる
 を知る、されども今や死はたゞわが家族の一人に入り來りし
 か、而して其一人は死後如何になり行くかを懸念するに及ば
 るものなれば憂愁の中にも大なる安慰を感ずるなり、これこの

赤兒の墳墓を見る毎にわが衷につよき願望起るを覺ゆ即ちす
 べての人の熱の血にて洗ひ清められ嬰兒の如くになりて神の
 國に入るものさならんことなり其後親愛なる甥ハリー、マ
 クストーンも長逝せしが其終に臨むや主にありて少からぬ安慰
 を得しと見へけり時にかれは十七才なりしがかれが受けし注
 意と教育とは親たるもの、其子を教導するの良き手本さといふ
 べきほどなれば其懇切なる母の教訓によりて凡ての正しき道
 を學び悪しき事には少くも染まず幼時よりよく主を敬愛して
 生長し為人快活にして勤勉鋭敏にして温厚なりければ、ある
 ものを失ひしは其兩親にせりて大なる試探なりきされどもし
 かゝる有様にて死せしむるを得ばわが子を皆失ふもわれ惜む
 どころはあらずと感ずされども或は認見なるべし恐くは
 主なばかれらなめぐみてこの世に於て其服役に擧げ用ひたま

ふことあるべし若し然らば日の曉の中に取去らるゝよりも其
 祝詞は遙くにまされるあり、
 「千八百三十一年一月十一日 二週間以前の安息日のことなりき、
 われ衣袋を替へんとしてありけるとき人來りて叔父ジョセフ
 ガーシー、ハノー、ルウ、井ツチに近き自宅にて突然昏倒して息絶
 へさり、且其時家にありしものはたゞ叔母のみなりしと告げし
 がわれこれを聞きしとき其驚嘆一方ならず胸迫り氣鬱して殆
 んど爲す所を知らざるに至れり、蓋し氏はわが父の如くに憊ひ
 たる最愛の人にして宗教上の生活をよく實踐し殊に倦れたる
 はりの謙遜にしてよく神に従ひ常に快活なりしにあり、また氏
 は福音の生ける役者にして奪むべく且つ親むべき人なれむら
 の死去は常に親近なるもののみならずすべての人にせりても
 亦大なる不幸なりしなり、」

此頃負傷或は疾病に罹りし水夫等を救ふの必要ありしと認め
 けられたる看病船の経費に充てんとて一の慈善會建てられし
 がエリサベスも其事業をよろこびて之に列せんことをもひ居た
 りし折柄女王アトレイド及貴顯夫人等も出席せらるゝと聞き
 愈々決して之れに赴きぬ却説エリサベスは女王にしてもしかれ
 が事業に同情を表し給ふときは其位置の高き爲め神の無理世
 に行ひ万民の利益を計るの大なる補助なりと考へたれども如
 何にせん朝廷の儀式嚴重にしてなか／＼を舞上するの機會
 なければ先づ自から女王に紹介せられんことを熱望せりされ
 ばかれ自から云へるとごく晝夜このことをのみ考へ居りしが
 遂に行くを可なりと信し其妹カザリン、ガーチーを従へて王宮
 へ行き門に入りしに其壯麗華美なるをみて大に落膽し一時は
 引返さんと思へども妹の勧めによりうは思ひ止りしがヤング將

軍は直ちにこれを見つけて女王の便殿に案内せり、問も無くし
 て女王及他の人々も出來り其中にて或者はエリサベスを敬遇
 し特にサセックス候は最も親切にしてかれを女王に紹介し
 女王は此會合を大に満足に思召されたり、此時よりしてエリサ
 ベスが謁見の途は開かれしが女王はこれによりて大なる利益
 を得たり、即ち其心中に諸種の仁愛ある建言に應ずる善良なる
 感覺起り慈愛は弘まり救主を對する信仰と愛とは増加してそ
 べてこの世のものをすてキリストの謙遜なる信者の受くべき
 眞の平安を得給ふに至れり、
 エリサベスはこの謁見を特別なる開始なりと云ひまた神の「聖
 旨に稱ふならばその祝福を得てこれよりよき結果の起らんこ
 とを願ふ」と云へり、
 エリサベス、フライは牢獄改良其他博愛事業等に盡せるところ皆

に自國じこくののみかざらす千八百三十二年其義妹ぎめいを従へてウエー
 ルスウエーに行きいアイルランドの諸所しよしよを尋ね千八百三十三年には家
 族ぞくを引連れひきつフランス西岸せいがんに近きちかジヤーンシー島しまへ渡りわた夏なつより秋
 にかけて數ヶ月間止まり居り病院製造所びやういんせいぞうしよ狂人養育所きやうじんやういくしよなどを防
 ひまゝアイルランドは英國えいこくと其管轄くわんかつを異にする故に近時英國
 に行はれざる改良かいるやうは未だこの地に用ゐられざるを見て一書を
 當局者たうきやうしやていに呈ししこの書状は直ちに印刷いんさつせられて廣く行はれしこ
 云ふそれ夫よりなほ勢力せいりよくある多くの人々に會せるうち偶たま其女の一
 人病やまひに罹りしつを急いそぎて歸國きこくすることになりぬ其女は後六週
 間の保養はやうを経て漸やうやく全快せんくわいするを得たり、

第九章 自千八百三十四年
 至千八百三十八年

「千八百三十四年四月一日 今日ドーレルセット及ヒハンツハンツ神
 の服務つごめの爲ために行かんいとす、ア、神かみは願はくはわれと共にあり
 われに膏注あぶらそぎてわがなす所ところをもて爾なんぢの榮さかを顯あらはし人々の徳とくを
 たてさせ給へわれにたすむと平和へいわをあたへまゝ聖旨みことづかにかな
 はむわが在あらざる間あひだわが子等こら及他たの家族かぞくをも守り給へ、主まは願
 はくはこれを爾なんぢの名なによりてきゝ入れたまへ、」

「十二日 昨日歸國きこくせりこの旅行りょこうは甚だ満足まんじつなりしを感謝かんしゃす、」
 其後エリサベス、フライフライはスコットランドスコットランドに旅たびせしが歸郷ききやうの後
 エヂンバークエヂンバークに於てなせし働はたらきにつきて記しるして曰く「これをな
 さんさんとめにわが召めされし諸集會しよしよくわいしよ諸家族しよかぞく牢獄らうごく避遁ひどん所等に於て大
 なるたすけのあたへられしを深く感謝かんしゃすわれ牢獄らうごく避遁ひどん所其他
 諸處しよしよに於ていさ殿たみかなる集會しよくわいしよを開ひらきしが人々の心こころと奇妙きみょうにも

わが方に開かれ、全く知らざりし人もわが雑費をいだしわが手
 助をなし、程にて已にわれを識れるものは勿論懇切なりき、願
 はくは主が此の價値なき婢に親切なりし人々に愛と恩恵を以
 てむくひ、彼等がわれに對する心をやほらけ神がわれをして
 其中にあさしめし服務を成就せしめ給はんことをわれは貧民
 に對する働き半獄を訪ふべき貴女等に關する規則を作ること
 等尙なすべきことをつきざるを知る、されどもたゞ精神にのみ
 はやることなく神が其榮光の爲め又人民の幸福のためわれに
 與へ給ひし服従、謙遜、忠實、勤勉、注意等をもて之をなさんことを
 ねがふ、

エリサベス、フライの一行は諸處にて山川の美を賞し、懇篤なる
 朋友に遭ひエデンメーグに來りしが此處にてエリサベスを其
 友及び共役者の厚き待遇を受け前に此地に來りて大に其注意

を惹きしことどもを成就せんさて時を力さを盡して働けり、
 最も緊要なる許多の慈善事業に於てエリサベスの老練と勤勉
 こと直接或は間接に皆與かりて力ありしがかれはまた日々他
 の人を益する爲にはいささか小さき時機をも失ふことなかりき、例
 之は其旅宿にあるや聖書朗讀會には必ず婢僕及旅客を誘ひ有
 益にして嚴格なる集會をなし常に人々交はるときは必ずその
 ものに善良なる感化を與へんことを心に期せり、されば旅舎の
 下婢もよく親切なる談話と有益なる忠告とを受けまた小冊子
 日課表などを與へられ、食馬車の馭者も路傍の小民も皆エリサ
 ベスの周到なる眼光を免るゝこと能はざりき、

「千八百三十五年七月二十一日 われ頃日封港監守人屯所全体
 の爲め圖書館を設けせんがため西走東奔して實に多忙あり、此
 のことにつきしを、當局者を訪問せしが其厚遇を受けしこ

「自からも驚くほどなりき」
 抑も監守人屯所は總て五百ヶ所ありて之を二十四部に分ち之に奉職するものは其妻子を合して二万一千人以上に達しければ英國中屯所全体の圖書館を建設せんとの發起は甚だ大なるものあり、
 政府は五百ポンドの出金を許可し其他莫大の義捐金も多くエリサベスの盡力によりて得られたり、
 この企圖は微細の整理に至るまで殆んど皆エリサベスの意匠にしてよく監守人等の利益に適せんことを計り自から其主となりて驚く可き迅速と周到なる注意をなしてこれをなせり、
 金錢の寄附のみならず多くの有名なる書肆聖書會社等より夥多の書籍をも受け之を金額に算すれば一千ポンド以上に達せり、

エリサベスが苦心空しくすして好結果をあらはし封港監守人屯所の官吏等は續々禮状を送りてかれが親切なる企圖を賞讃し其家族も大に喜悅せる由を述べ頌るエリサベスが心を慰籍せりされども彼が最初より起せし願望は單にこゝに止まらずして彼等がよく精神上の利益を得て徳をよつるに至ることなりしが其蒞きし種々悉く神の祝福を受けしが如く見へき、
 ジヤ―セイ島の旅行より歸へれるとき己に一の悲むべき事件は起りつゝありき、されこれを書いて日をく、

「十月十三日アプトン　我が親愛なる妹兄弟ジョセフの秀逸にして和順なる妻メリー、ガ―チーの激症を其死去との爲めノルフォルクへ行き昨日其人と共に歸郷せしがメリーはこの時年齒漸く三十二に達し心靈を以て充てる活潑なる神の役者に―て性別潑にして教育あり大度にして快活なればうの夫を助け

て足らざるを補ひしこと實に減少にあらざるなり、初めかれの病に罹りしを聞きしときハそれハ決してかれの死することなば思ひ起さざりき、蓋しかればこの世にてあきらかなる召を蒙り居たるを知らざりされども神の道はわれらが道の如くならず主の聖旨ハわれらの考への及ぶざるどころなり、又われらの親愛ある兄弟ジョセフの耐忍を實に強く其歎んで神の聖旨に服従することと人の操縦となすに足るなり、葬式は人をして深く感ぜしめしがわれらも午後にも非常に悲しき會を開きわれらが親愛なる兄弟フランシス、カンニング、サム所請をなし其妻は歎語を述べ、ジョセフと亡妻の性質其死によりてかれが蒙れる損失とまたこの場合にありても尙ほかれが心中に感ずる慰撫等とを述べ、日は暮るゝに至り近隣の貧民と聖書を讀みて其會を終はりしが、われは其時胸に起り、嚴格にして神聖なる愛

情をあらはすの語なきを惜しむ、

「千八百三十六年四月十四日、われら將にアイムランドに旅せんすとす、願くは主よこの信仰の働きをわれ及わが同伴者の爲に祝福し、常にわれらが守護者扶助者となり、われらに能力と喜悅と平安とを與へ給へ、アーメン、」

五月十三日、アプトンレーン、昨日午後家に歸ることを得たり、かゝる幸福なる歸宅はいまだ替てあらざるどころにして、歡喜極まりて哭するに至りぬ、常に悲惨の爲めに流せる涙をばいと愛する良人と子女等により喜悅の爲めに流さしめらるゝところとなりぬ、われ歸りしとき萬事好き都合なりしを見しのみならず、良人はそれを慰め、またわれを驚かさんとてわが室を造りかへ、且つ女等は種々美しきものを贈りて之を飾りたれ、之れをうくるの値なしと思ひし、彼等が愛の供物をばいたく

心によろこびぬ。這回は様々なる事情のさすけによりてわが心のあしきを深く感おて歸りしゆへ此旅行は特にわが爲に有益にしてわが心を開きて一層よく福音の眞理を覺らしめまたわれに勇氣をあたへてこれを大膽に述ぶることを得せしめり。以上載るところを見よこの婦人の特性の如何を見るにたるべし即ちかれが如何なる事情の下にありても常に謙遜自卑なることなりき。かれは常に心身を勞して万民の幸福を進捗せんと欲り其克己の精神とかれが親近の者をして深くかれを愛し競つて其の用をなすに至らしめたり。又其夫及び子女が彼に對して顯はせる愛情の表徴とかれが如き其妻慈母の正に受くべきものなるにも拘はらず喜びの涙を流し競々として自から之を受くるの値なしと言ふに至りては其心情の高潔自遜なる筆紙のよく盡すところにあらざるなり。

「家に歸りし今わが熱心なる新願はこの旅行によりて得たる經驗により利益を受ひんことなり。願くは聖なる教主のうの靈によりてわれをして眞理の道を脱せすますく神に近づかめ。其權によりてわが聖きものを望みて性急なる辭を直し給はんことをわれは這回の年會にては必ず確乎たる方針を得んことを又それは何事に於ても正義の宣傳者たらんために家内の務をもよく謙遜と敬虔と畏と愛をもて成さんことを深く願ふなり。」

六月十二日(週の第一日の朝) 昨日は大英國會社の集會ありしがわれは多くの働ききの神の祝福を受けし諸方に於ける夥多の婦女はうのあしき道をすて、善良なる生活をなし或は幸福なるキリスト信徒の死を遂ぐるに至れるを聴き感泣の情に堪へざりき。」

「十八日 この数日間わが靈は殊に重荷を感ず、一昨日の如きと種々の用ありてわれを訪問れしもの二十九名もありきかく多くの訪問を受くるは殆んど耐へ難ぬるほどなれば一度はこの處に止り居るを狐疑せしがいまこそすべてを主の前になまわが身もわが愛もみな主に任せんと欲す、願くは神よイエス、キリストによりろの恩恵の富に従ひてわれを助け足らざるを補ひ給へ、アマメン」

英國中の封港監守人に圖書の分配を任せられたる委員よりエリサベスの許に報告書達せしが四百九十八の圖書館は諸處の屯所に置かれ、其包容する書籍をすべて二万五千八百九十六冊の多きに達し其他二万五千の書籍雜書とは全く公共の禮拜會に出席する能ざる者に分布せられしよしを報せり、

千八百三十六年にエリサベスは再びガーンジー及ジャージー

へ行きしが其三年前に來りて當局者になし、疎言は當時已に行はれつゝあるを見て大に喜び、其姉妹ホアリーの病みて危篤なりしとき、しかどなほさゞまりて病院禁酒會等の訪問委員を悉く始めより忠實なる賛助者なりし人々の監督の下に置き、こゝに始めて安堵を得て歸宅し數日の間懇切なる看病をなし、ホアリーは遂に物故せり、其後二ヶ月許を経て良人、女カザリンとはノールマンデーにて馬車の爲重傷を負ひしとの急報に接し直ちに立ちて其地に赴むしがこれによりて多年かれが熱望せしフランスへ行くの時機を得たり、エリサベスは夫と女との全快するをまちて其子ウヰリヤムを携へセント、アウエルの牢獄を見分し其他博愛家の手になりし諸種の働きを見て之を樂めり、

千八百三十七年エリサベス、フライは其兄弟ジョセフ、ジョン、ガ

「子一を伴ふてリヴァプールに至り艦房にて黙禱を共にせし
のち相分れてジョセフの神の召を受けアメリカに向つて解
纜せり、

この頃の事なりけんエリサベスの上には重大なる試探起れり、
則ちかれが近き親族の者が友會徒とは其禮拜の方法を異にせ
る他の宗派を信ぜしより宗教上の一致と交通さばそれが爲大
に碍げられしこと是なり、されどもエリサベスは外面に於て些
少の差異あるも其心に於て皆よく結合せるものなることを信
仰によりて悟りしかば人々を勸めて家族の集會を定めの際に
開きて聖書を讀み又祈禱などして之に列するものをして大な
る利益を得せしめたり、

千八百三十八年エリザベス、フライは其幕撤せし友ジョセフ、フ
ォースターと同伴にて再びフランスへ行き諸處の牢獄を見分

し貴婦人を導きて牢獄改竄の策を關ト學校訪問會等の進歩を
謀らしめ國王及女王にも謁見して陛下のますと宗教上幸福
なる生活に入り安息日を固く守り聖書をよく讀まれんと熱
き願望を奏上し第四月に至り安全に英國に歸着せり、

千八百三十八年九月二十六日 われら去る週の第七日に歸宅
せしが家族のものらは皆安康にして愉快にみえしかわれは大
に安慰を得たりわれは出發の際に當り若しわが旅行に於て主
の聖旨にかなひ主に召されて重き服役を任せらるゝを得を神
の祝福を得て行くわれのみならず家に止まる親愛なる人々を
よく守られんことを深く願ひしがこの祈願のゆるされしとる
しハ今あらざれざりわれ何をもてこの大なる恩恵を謝すべき
かを知らざるなり、」

「十月二十八日 われ愛する其人とクロイドン及アイフィール

ドに快き遊歴をなしサツセックスにて満足なる會を開き一の
友會徒の假家にて聖書を讀みまたそれらが會て建てし書籍館
には來館者の多きを見われらが主の爲になせし服役の空一か
らざりしを知り感謝の念に堪へざりき」

われまた愛する良人及妹エリサベスとエツセックスなる二三
の集會を一見せん爲に出行けり」

「十二月六日 フランス及其他諸國を旅することばわが義務な
りとの信仰を今朝議て月次會に陳へぬさてわがかく決心せし
を願ふ永き熱慮の後のことにてこの夏より已にアメリカの親
愛なる兄弟の許に到らんか又は歐洲大陸に渡らんかと思は
りてのみ居たりしが遂に歐洲に行くの可なるを感下ければこ
れを今朝わが月次會の會員等の前に陳べしなりこの月次會に
て同會員ならざりし數名の友會徒も出席し嚴肅なる禮拜をも

て始まりしがわれと妹とはスコットランド行の簡書を返して
歐洲行きものを請ひ先づパリに到り夫より佛國の南部な
る友會徒を訪ひ歸途歐洲の他の處々を尋ねんとわが目算を
述べければ會員及其席に列せる會員もらざる人々よりも同情
と賛成を得たり、

われこの上を何日出立し誰を伴ひ又先づ何處に行かんかと昔
攝理の指圖に従ひすべてのこと一に最も聖にして恩恵ある神
に任せ奉らん、勿論われ神をわが首わが助者と呼ぶことを得
るハ偏にうの限り無きの恩恵とわが受くるに足らざる深き愛
さによることを知るに雖もまた聖題のさすけによりわが主は
わが「奇妙また識士また大能の神さこしへのち、平和の君」なり
と信するを得るなり、

エリサベス、フライは其企圖に對して四季會より懇篤なる賛成

の蘇状を得し後も尙ほノルフオルクに數日を過せり、

第十章 自千八百三十九年 至千八百四十一年

「千八百三十九年一月十六日 週の第二日の朝禮拜前にわれまた佛國へ行かんぞ決心しぬ、而して今は會友にも勵され神の助けをも被りて万事の如くなればわがキリスト教會の許可をうけ此の重要な務めを盡し得るは明なり、
先きにわれらが爲し、旅行の結果につきスコットランドより大に喜ふべき書簡來り將に數ヶ所の遊遊所は建てられんとし女囚徒も遠からずして矯正せらるべしといひぬ、佛國よりの音信も亦一としてわれを勵まさざるはなし、
過般亦眠せられし愛友ゴログリー公爵夫人はわれらの訪問をうけて大に其信仰を進めしことをいひ來り其他所々の監獄には改良行はれ新約全書は囚徒及病院の患者等に愛讀せらるゝに至り、われは實に喜悅にたへず神に向つて偏に其恩恵を感謝

する所なり、
われも出立前に當り數家の婢僕を集めて會を開きし其數極
めて多く殆ど會堂に充滿せり、思ふに彼等皆慰撫を得て樂し
く歸宅せしならん、

舊友ジヨシユア、フオルスターとまゝとエリサベス、フライに伴ふ
て旅路に就きしが其懇切なる同情周到なる配慮明敏なる裁斷
等は皆大なる助けとなれり、エリサベス、フライは亦其人及一女
をも伴ひしが其人は益々熱心に彼を扶助けて其天職を盛さしめ
んとせり、

エリサベス、フライ等のボローン港に上陸するや、渡多の人々は
已に其處より來り居りて盛に歡迎せり、

エリサベス、フライは直ちに其地の監獄を訪ひ夜に入りては四
十人許の人々に面會せしが多くは先きに彼が主動者となりて

組織せし地方會の會員にして其働きは好結果を興し貧民迄も
之が爲に募捐金を出だし又は聖書報章等を買ふて之を愛讀す
るに至れり、

旅亭の婢僕等は又聖書を與へられんことを懇願せり、蓋彼等ハ
嘗て所持せし聖書を田舎の親友に貸し、に餘り熱心に愛讀
せられて取戻す能わざりし故なり、

エリサベス、フライを佛國の首府パリに著して左の如き日記
を書けり、

「三月十七日パリス われもわが此地に於て爲すべき事業を神
に指示され其能力と聖靈との助けによりて主の御榮の爲人の
利益の爲又わが心の平和の爲に奮て之をなさんことを願ふ、
神よ若し聖旨に適せし爾のこれらに伴せ給ふ御業を興へわれ
らなしてます、服役に勵ましめたまへ思ふに爾も如何なる

小事業と雖均しく恩恵の下に置きて幾多の人々を助け給ふ願
くは此不肖なる婢の働きをも顧みて同志者の數を増さしめ世
と肉と惡徳との勢威を振へる此地に於て人々を善に導き爾の
榮光を輝さしめたまへ、願くは此拙き祈りを聽上げこの婢に與
ふるに靜和忍耐に於て信仰深き心を以てし偏に爾の慈と愛と
に依頼するを得せしめられんことをアーメン、

「二十四日 神の憐恤によりてわが叫びは聽かれ其後小集會に
臨みしに或者は著しき恩恵を被りわれらはますく神の前に
いととなり、殊にそれは聖言を傳へ且祈禱をさゝぐを得て大なる
慰めを受け會終りてわれらは公使の家に至り厚く歓迎せられ
たり、

週の六日にわれらは佛國メソヂスト派の大なる學校を參觀せ
しが中に百人許の學生ありて皆懇切なる教授を受くるが如く

使徒行傳十
○卅四及卅五

見えたり、それは學生及其父母等に對して十分忠言をなし心は
爲に爽快に感ぜしが寒氣の餘り強かりしたため齒に劇痛を起し
終日治らずして心身共に苦悶の中に沈みぬ、
夜は慈善上及宗教上の目的をもて數多の人々を集め初の程そ
窺かに其結果を危ぶみしる時至りければ衆人の前に立
ちて黒奴の車に就きて少しく語るを得ヨシユア、フオルスタ
ーも同題にて流麗の辨を爲され暫時聖書を讀みて會をとどし
がされは此時非常なる天詠を被りしを感ぜり、
翌朝されはローマ教徒なる一貧女の家を訪ひ其子女と朋友と
にも面接せしが實に能くキリスト信徒の生活を盡し、家庭な
りき、それらと是によりてますく「神は偏らざる者にして何の
國民にても神を敬ひ義を行ふ者ハ其聖旨に適ふ」といふことを
悟れり、

「週の第三日 病院を訪ひロルド、ウヰリアム、ベンチンタ氏の宅にて懇應を受けたり、思ふに神ハ必ず其聖なる目的を達せらるゝならん、されど斯かる境遇に處してハわれを能く自ら慎まざる可からず、」

「週の第五日 今朝を嚴肅なる禮拜式あり多數の來會者ありしが重に婦人にして或は貴顯あり或は名望家ありき、これは天祐により祈禱し説教をるを得たり、」

此旅行中、エリサベス、フライの會に連り一人は其説教を評して實に驚くべき感化力を具へ懇める者に不思議にも慰藉を與ふといへり、

「四月七日 或日、われらは親友マレツツ氏の宅にて懇應を受けしが同氏の家族は極めて多人數にて種々有益なる談話も出で且神の愛の人々の上に加はり一を感じ、昨夜は又百人許の人

々會し監獄の談話出でわれは從來の獄舎の状況を今日の進歩とを語り獄舎短風事業は是非ともキリスト教主義に依らざるべからざることを云ひ、聖書の價值及悔改の結果を實例に照して指示し後囚徒に關係ある路加傳十五章を朗讀して少しく其説明をなし、暫時黙禱して會を閉ざしが舊教新教の信徒は云ふに及ばずギリシヤ教の信徒迄も同席にあり、之を國別にそればギリシヤ人アイオニア人スペイン人ポーランド人伊太利人獨逸人英國人亞米利加人佛蘭西人等ありて殊に英國人及佛國人中にはブリグノー、ルース侯、サーヂニア國務大臣、ザートリンズ、親王等の如き貴顯居りき、斯くて此週間は將に盡きなんぞす、若し人の利益の爲又神の榮光の爲に費されたりせば實に己が本望なり、ア、神よわれは身の不肖にして御前に近くの價值なきを知る、されど爾の愛子にしてわれらと爾との仲保者なるキ

リストの功によりわれは今敢て聖位に近き上る、願くはわが罪を赦したまへ、われは偏に爾に奉仕へ眞理と正義との爲に盡さんと欲を、されど若し不幸にしてわが薄弱なるが爲に御攝理に汚點をつくるが如きことあらば何卒全能の力をもて之を洗清めたまへ、又わが語る言語を悪み惱める者を怒め感へる者を教ふるの能力を與へ人々をキリストに導くの器とらしめ給へ、ア、最愛の主よわれは榮光の爲に他人の爲に又わが心の平和の爲に益々従來の方針を取りて進まんを欲す、何卒常に傍に在ましてわれをたすけわが踏むべきの路を教へたまへ、神よ又爾は此の懇願を聞き納れ本國に於ける親近者及處々の獄舎に於ける囚徒等に格別の擁護を與へ給はんことを、

「三十一日パリス 心を静めて過ぐる一週間のことを回想すれば神の憐愍の實に大ありしを知るなり、

第一日は大なる集會もあり五人の子女もわれと共に在り極めて満足なる日なりき、

(此時エリサベス、フライが家族の數人は暫時パリスに滞在せり、)

われはオルリアンの公爵夫人と有益なる懇談をなし又數ヶ所の獄舎に至り婦人會を興して獄舎及病院に於ける新教信徒を訪問せしめ、其夜はロルド、グランヴィル氏の宅にて當世の有力家と會食して種々面白き談話をなし、ペレット男爵の宅にも二回招かれ、ロルド、ウヰリアム、ベンチンク氏の宅にても厚き饗應を受けぬ、其他これに數家を訪ふて利益を得、一日は午前を全く女子等と暮しぬ、又これらの閑き慈善夜會には百四十人も出席者あり、ジョシユア、フオルスター氏は過ぐる數夜の話に他の事を交へて面白く演説し、これに上等社會の人士が實例をもて

下等社會の人々を感化するの必要を説き、夜史かし芝居等の書
 を述べ貧民にキリスト教主義の教育を施し聖書を其家族の者
 に讀ましめ圖書館を建て、書籍を貸し地方會を興して之が救
 濟策を講ずべきことを忠告し、終りて哥羅西書三章及希伯來書
 の末章の二十節と二十一節(顯くは窮なき契約の血に由て羊
 の大牧者なる我儕の主イエスキリストを死より甦らし、平安
 の神イエスキリストに由て其悦ぶ所を爾曹の心の中に起し又
 爾曹をして其旨を行はせんが爲に凡ての善事は於て爾曹を全
 うせしむべし榮光彼に歸して世々暨なからんことをアーメン)
 といへる所を讀みて會を閉ぢ皆愛と平和とに充されて敵トぬ、
 第五日はこれらは數人の愉快なる精神家と會食し夜に入りて
 は佛國の各地より集まりし傳道師に逢はんがため朋友の宅に
 行きぬ、

希伯來書
 十三〇二十
 及廿一

二十八日フオンタインアロー われらはパリスを去らんぞす
 る前日に當り警部長を訪ひ獄舎實況の報告をなし新教を信せ
 る囚徒を見んとする貴婦人等と別れ、數多の有益なる談話をな
 し還からずして佛國の女囚徒は皆婦人の監督を受くる標法律
 の發布あるべしと聞きて大に喜びあへり、
 其日及其夜はわれらの宿に離別に来りし者極めて多く中には
 ギリシヤ教の信徒も數多ありて皆われらの事業に同感を表し
 ぬ、
 エリサベス、フライは四月廿七日を以てパリスを出發しメラン
 を過ぎりてフオンターンプローに至れり、此時佛國內務大臣は
 フライ夫妻及ジヨシユア、フォルスタアの三人をして自由に國
 内の各監獄を巡見せしむべきため一封の紹介書を下し、
 三人と先づメランに至りて之を用ひしに大に歡待せられて精

一く獄舎の状況を取調ぶることを得たり、
 エリサベス、フライはオーキセルにても止まりて監獄を一望し
 アビグノンにて左の如く記せり、
 「五月九日 われらはライオンに至る迄は格別大なる働きもな
 さざりしが同地に達してより初めて多忙の日に遇ひぬ、第一獄
 舎及病院を巡視し女學校を訪ひ或は貧困なる新教徒を集めて
 聖書を讀み或を親しく其數家に就きて有益なる懇談をなし且
 有力家の多く集まりし緊要ある會を開きしが其時われも監獄
 問題につきて演説し先づ人心の改良はキリスト教に依らざれ
 を決して實行すべからざることを説き次にキリスト教信徒を
 公私の別なく能く其義務を盡して世の模範となるの必要を論
 じ、最後に有益なる會を興こし慈善事業を企てキリスト教主義
 の學校を建つべきことをいひしが皆能く静聽して厚くわれら

を待遇しぬ、思ふにわが演説は多くの人々に感觸を興へ謙遜な
 るキリスト信徒はわれらの來りしことを喜び「ならん、」
 エリサベス、フライ等はアビグノンを立ちてニスメーに赴き常
 よりは永く滞在せしが万事皆耳新しくして一週間許は非常に樂
 しみ日を送れり、素々ニスメー及其近隣にハ友會の主義を守れ
 る人々各處に散在せしかばエリサベス、フライ及ジョシュア、フ
 オルスターはニスメーに住める凡ての友會徒の家を尋ね且其
 會にも臨めり、蓋し此友會徒はナンテ令の撤去に遇ひてセベチ
 一山に匿れしカミサイド人の後裔あり、
 次ぎに至りしはコンヂエニーなるがこはニスメーよりモン
 トペリアーに至る路の西方に當リニスメーより十二英里を隔
 つる一寒村なり、村民は殆ど皆友會徒にして極めて親切なりけ
 ればエリサベス、フライもジョシュア、フォルスターと共に各家

を訪ひ且其集會にも出席せしが會堂は清潔にして能く來會者の便を計り一として不満足なる點なかりき。又其近村の人々も皆福音の眞理を聴くに熱心なりしと見へ週の第一日にコンヂエニーにて會を開きしが聽衆多くして會場には立錐の地なく或は戸に上り或は窓外に立つ者さへありて皆熱心に靜聽し、次きの第一日にカルヴキッソンに開きしときも等しき有様なりき、三人の旅行者は二十七日を以てコンヂエニーを出發しニスメーに歸りて醫師の厚遇を受けウルの古市を過ぎりてマーセールに赴きしが未だコンヂエニーに在りしときエリサベス、フライは記して云はく、

「五月二十二日 昨日とてが誕生日なりしが神の愛と憐愍によりて朝より夕に至る迄極めて爽快に感じぬ、思ふにわが斯くも神の慰めを受けしは決して正義の爲に働きし故のみならず

して全く神の恩寵によることならん、神よ願くはわれらと共に在まし見ざる所なき眼を以てわれらを守りたまへ、殊に爾はわれらが働きを恵み憐むべき人々の利益を計り爾の榮光を顯はすことを得せしめられんことをアーメン、」

「六月二日 コンヂエニーは新奇なる土地にしてわれらは皆之を樂めり、田地には葡萄桑橄欖無花果等を培植するも五穀は殆ど無く空氣は新鮮にして甘く山を概ね禿にして灰色を呈し地中海と處々より望見するを得又周圍に重なる新教徒の住める人口稠密なる村ありわれらは之を訪ふて其中に開かれし會に臨みしが人民と皆熱心に眞理を求めわれを尋なくも厚く神の恩恵を受けて彼等に對するを得ぬ、蓋しわれと此時程心に平和を得て慥に身の正路にあるを自信せしこととあらざるなり、」

エリサベス、フライ等をマーセールを訪ふて種々珍らしき事物

に接しタウロンに行きて獄舎を巡視し夫より直ちにエリスに
赴きしが此地は大に一行の人々の注意を惹き殊にエリサベス
フライは熱心なる牧師の等を受くる僅の新教徒あるを見て大
に之を喜べり、

一行の人々はエリスより再びニスメーに歸り地方會の爲に盡
力して週の第一日即ち六月十日を過せりエリサベス、フライ
そ之につき記して云はく、

「六月日れらがニスメーにて過し、第一日朝モメソヂスト派の
會堂に會を開きて何人にも出席せしめ夕モメソヂストの會堂に
集らざる者あるを恐れ大なる學校の教場にてまゝ同様の會を
開き凡ての人々に參會せしめんを企てし故其前夜は之を苦慮
して殆ど安眠する能はず彌朝の會に臨むやわれは神の前に平
伏して頭を上ぐるを知らず若し神の國を廣めんとして爲すに

あらざればわが獨力にては決して好結果を收むる能はざるこ
さを感じ偏に主の憐恤を乞へり幸にして通譯者タリスチン、メ
ーヂヨリアーを來りてわれを助けわれは福音の良理を傳ふる
に驚くべき能力を得聖靈により聖書により又神の攝理と御事
業とによりて主へ大なる敬師にして其敬と恩恵に富めること
を説きしが聴衆ハ皆靜肅に之をき、ぬ、而してわれハ終りに至
りて祈禱の必要を感じ何人か立ちて祈らんことを望み居りし
が忽ちメソヂストの傳道師を非常に感動せし有様にて立ち上
がり會衆の同意を得て祈禱せしゆへ皆満足して散會するを得
ぬ、
夕方には數百人も入るべき講堂に赴きしが既に數多の人は來
會し居り重にも佛國新教徒にして中には牧師も交り居り此
處にてはまゝ聖靈の助けを受けて講壇に立ち會衆がキ

キリスト教會に於て緊要なる位を占むること及其信仰を堅くし實行を重すべきことを説き、次に彼等は新教徒として實に佛國內のみならず隣國民に對しても「丘の上」に建られたる城の如く「おらざる可からざることを云ひ、且神の眞理を廣むるには實行と辯論とによりて之を宜へ傳ふべき旨を語りしが此時も皆熱心にわが説教をき、親友エミリン、フロツサードは眞はしき新説をさしげしが其云ひし言語を皆人々の利益となり、殊に神の恩恵ハミが上に下りしが如く感下ぬ、而してこれは實に會衆の皆愛と生命と平和とに充たされて教會せしを神に感謝せざるを得ざるなり、

翌朝 ジョシユア、フオルスターとそれとはコドグナン村にて會を開きしが參會者多くして半は屋外に居らざるを得ざりき、此時わが最喜ばしかりしとコンヂエニ一及其近隣より數人

の愛友來りしことにて之に懇懇なる離別を告げ、堅くわれ足るの正路に在るを信ぶ牧師が嚴肅なる祈禱を以て會を閉ぢぬ、夫よりわれらはモントペリアーに至りしに緊要なる服役はわれらの爲に具へられぬ、即ち此時新教徒の婦人會へ組織せられて女子監獄の爲に奔走し獄舎改良及女吏登用の建白を典獄に爲し、所にてわれの來りしハ恰も早天に雲霓の願はれしが如くなりき、且知事と極めて親切にしてわれらに多くの便を與へ郡長其他の人々を監獄所に至りしがわれは天祐によりて貴顯の前をも憚らず女囚徒等に福音を宣傳することを得ぬ、」

エリサベス、フライは堅忍不拔の氣性に富み体力の許す限りハ如何なる障害にも打勝つを常とせしが今は疲勞のため且酷熱のため稍其健康を害ひ心身の休養必要となりしを進まずながら其人の勸めに従ふて暫時ビンニース山中に避暑すること

なせり、其時の日記に云そく

「われらはツールースよりバクネレ、デルーコンに行きしが極めて善き場所にして樂しき日月を送りぬ、該地滞在申われと其及子女等と共に(ジヨシニア、フォルスターも暫時は同道せり)二回爽快なる遠足をなししが殊に其スペイン行はわが意に適ひぬ」

此遠足の一はドウー湖に行きしにてエリサベス、フライ及其娘は椅子に乗り四人宛の力持に擔はれて登り峻阪の中途なる岩の差懸り狭き草地に來りて休みしが其處に荒々しき百姓の數人群りて息ひ居りしを見エリサベス、フライへ其傍に坐して談話をなし少ありて八人の力持も來りて其群に加はりしかを佛蘭西語の聖書を取出して數節を讀み四方の風景を指して神の万有に於ける驚くべき所爲を説き且人を救はんがため主イ

エス、キリストを遣と給ひし神の限りなき潤恤を語りければ皆熱心さ尊敬とをもて之を聴き興へられし雜書をば喜んで貰へり、

此後一二日にして彼等ハまとスペインに遠足せしが出立の前夜ハ涼しくして雨さへ降り來り明くれを霧深くして日光を掩ひて暑威大に減下快くルーコンを出で、ピアーアの林谷を過ぎり險阻なる山路をたどりて漸々上りしが遂に山頂に達すれを路はポスチロンさいひて境界標の有りし所より急に下りどまり道案内は彌々スペイン領に踏み入りしことを告げぬ、夫より一時間半も下れば山毛櫛等の生茂りて田地の所々に散見せる所あり雋色の衣服を着赤き帯をしぬ先きの長く垂れし帽子を被りたる二人のカタロニア人居りけるがエリサベス、フライも兼てジヨシニア、フォルスターに托してスペイン語に

て聖書の句を抜き、小冊子を數多所持せしゆへ其數冊を二人
 に與へ草の上に坐して食事なせしが其一人ハ山羊の群を引
 連れて栗の木の下に至り頻りに與へられし小冊子を熟讀せり、
 エリサベス等は暫時休息の後また出發して小舎の散在せる所
 に達し聖書の抜書きを取り出して各戸に至り或は牛小屋の飼
 槽に入れ或は戸の釘に掛けて去れり蓋しエリサベスはスベ
 ン人は一般に書物を受して大切に之を保存することを聞きし
 ゆへなり、
 ルーコン滞在中エリサベス、フライハ同伴者の助けにより巡視
 せし監獄の實況と其改良策とを記せしいと長き隨白書を内務
 大臣に出す爲に草一又稍短きなる警部長に出す爲に書けり、
 此の保養中エリサベス、フライハは心身共に大なる休息を得て全
 く従來の健康に服せり蓋し彼ハ天地の美を樂むの能力を賦與

せられ、纏々たるアルプス山を望むも鬱々たる綠林を見るも
 嶺に於て甲殼を拾ふも路傍に於て花卉を探るも輝々たる日没
 の景を觀るも皎々たる晴夜の月を眺むるも常に天父が大能の
 手を其子女等の上に加へ深き恩寵と清き娛樂とを與へ給ふこ
 とを感じ、エリサベスハまた美術の嗜好を有し不徳なる美術
 家とは異りて専ら神の服役の爲に其能力を用ひ人の利益を謀
 り或は人に無罪なる樂みを與ふる者にあらざれば一も顧ること
 さなかりき、

ア、誰か不徳の美術家を見て悲痛せざる者あらん、彼ハ天より
 非凡の英才を賦與せらるゝにも拘はらず悉く之を不潔の用に
 供し人生に必要にして且眞正に美麗なる者を作りて全能なる
 造物主の榮光を顯はさんとはせず却りて人を誘ふて悪嗜好を
 養はしめます、世を腐敗の中に陥れんとす、ア、亦何の心ぞ

エリサベス、フライはトローロースより歸り記して云はく、
 「われらは週の第二日にトローロースを立ち佛蘭西の南部を旅行
 せしが暑威甚しくて進路も抄らす宗教上の働をも爲す能はざ
 りしがモントペリアー及ニスソーに來りて親友に面會し先き
 にニスメーコンヂエニー等にて主の爲に働かしわれらの服役
 は大に其効果ありしことを聽きぬ、ア、天父よ願くは爾のわれ
 らを器として播かせ給ひ一種を恵みわれらを導きて之を培養
 に盡力せしめ遂に善き果を結ぶに至らしめたまへ、神よ又爾ハ
 子の名によりて此婢の祈りを受けわれらが相離別するに至る
 までわが家族の中に愛と平和とを下しとまへ、」
 エリサベス、フライを瑞西のベセーレンに至りしときトロンチン
 大佐の宅にて百人餘りの人々に會せしことあり、一青年其有様

や

を記して云はく、
 「われらは勿論慈管問題に就きては哲學的の議論をきく積りは
 あらざりしがフライ夫人の唇より出でし言語は凡て柔和平易
 にして能く人の注意を喚びわれらをしてイエスキリストはわ
 れらの罪を贖ふために十字架の苦を受けられしことを思はし
 めんさするの熱情ハ話の進むに従ふてますます甚しくなれり、
 余も今尙夫人の言を記膜す云はく「われ之を思ふに常に主キリ
 ストの愛を熟考して後餘念なく事を處するの他別に忠實に神
 に仕るの道なきを信す」室内は聴衆をもて充滿せられわれら
 學生は廊下に立ち階壇に登り又は開放せし戸側に集まりて呼
 吸も斷ゆる許りの熱心を以て之を聽きしが、夫人は語り了りて
 親切にもわれらの處に來りわれらが席なくして大に不便を感
 ぜしを悲むの旨をいへり、余も當時を回顧する毎に未嘗てトロ

ンチン大佐の腕に倚りてエムラ、ハーブ氏の傍に立ちし夫人の
 丈高き容貌と其嚴肅にして温和なる顔色とを眼前に喚起せし
 んばあらざるなり、思ふに斯かる場合に遭遇するを得るを生涯
 にも極めて稀にして實に己が肥應の國の縁點ともいふべき者
 かりしなり、望らくはわれハ決してペセーンに於ける當日の感
 觸を失ふことなく其時學びし教訓は終生忘るゝなからんこと
 なり

週の第一日の朝エリサベス等を常の如く其室にて友會徒の單
 純なる例に従ふて禮拜せしが他に數人の參會者もありて極め
 て靜肅なる會となれり、夜に入りては聖書朗讀會を開きしに數
 人の牧師及或は正教會其他の教會に属する數多の人々も來れ
 り、

此時エリサベス、フライは以賽亞の二十八章を讀みて暫時説明

し終りて熱心に會衆牧師チエ子バ人民等の爲に祈禱せり、
 其後の日記に云はく、

「ローサンにてわれらは一人の親友に遇ひぬ、此人は英國にて交
 りを結びし人にして有力なる牧師あり、其後われらは監獄を訪
 ふて女囚徒に福音を傳へしが或者は大に感ぜしが如く見へき、
 夫よりフライマイグを経てマーンに赴き其處にて再び監獄を
 訪ひしがチエ子パローサン及マーンの懲治監はわが見し中最
 も進歩せし者なりき、又われはマーンにて女囚徒に宗教上の話
 をなし、こゝにあり、且大なる小學校をも參觀して其組織の善き
 を稱讚せしが聖書の研究を尙ほ盛にせんものなと思ふて之を
 校長に語りぬ、

週の第一日ハプリンツに在りしが計らずもエデンバラーより
 來り、エリサベスの親友に面會して終日楽しく甚し聖書を朗

讀して相別れけり、是より先きブリーツ湖を越へしとき小舟を
 漕ぎし少年が一小屋を指して母の其内にて病に苦み居れるよ
 しを語りしかばエリサベス、フライは深く之を心に留め置き再
 び湖水を渡りてボイニゲンに歸るに當りまさしく上陸してブ
 リンツの牧師の妻と共に其家を問ひしに病人は廊下に臥し居
 りて傍に聖書を置き身体大に衰弱して將に死ぬ計りなりしが
 ばエリサベス等は親しく病床に就きて之を勵まし又有形上の
 缺乏をば牧師の妻に托して充さしむることせり、
 ボイニゲンに在りしとき旅亭の主人は常にエリサベス、フライ
 等第一日の夜の聖書朗讀會に參會せしが其時マアリナ、コー
 スといへる敬虔にして悲痛に沈みしが如く見へし一少女も之
 に従ふて來りしことあり抑此少女は其母と共に國教を脱して
 メソヂストに類似せる或る宗派に入りしが父は粗忽にして無

智なりければ大に之を怒り妻をば嚇し娘をば家より逐出だし
 少女も已むを得ずして機を織りて日に九ス一宛の錢を得て自
 活せざるを得ざるに至りバーンの人々は之が仲裁を試みしも
 更に其刻あかりしなり、然るに此時古びたる獨逸の小新聞は偶々
 此旅亭に來り主人は中に「フライ夫人の小傳及其慈善事業」とい
 へる長文あるを見て初めて稀有の客の其家に止宿せるを知り、
 遂に之にマテイラの世話を頼まむ其父も之を拒む能はず容易
 に彼を家に歸らしむることを得べしと思ひ豫め之を其父に報
 せし置きエリサベス、フライ等とマテイラとを馬車に乗せ自らは
 禮服を着け之を御して其家に至り、乃ち入りて面談するに初の
 程は父もわが乱暴と殘酷とは皆わが父と學校教師との致せし
 處なりといひて取合はざりしがエリサベス、フライが懇篤なる
 和解は痛く其心に徹し涙を流して前非を悔ひ遂に親子相接吻

して其局を結ぶに至れり、其後エリサベス、フライはマテイラと
 其母と數人の隣人を集めて宗教上の話をなし、密かに其家の
 和解を全ふせしことを神に感謝して別れを告げぬ、
 ア、エリサベス、フライハ亦如何なる憐恤の役者ぞや、彼を器と
 して神の人に與へ給ひし利益と殆ど數ふるに遠あらざるなり、
 されば何故に彼が如く數多の慈善事業を到る處にエリサベス、
 フライを俟ちしやとの問を自然に起るべき疑問にして之に對
 ふるには彼を全く神の使命を帯びて來りしなりと云ふの外な
 し、思ふに神を聖靈によりてエリサベスに與ふるに其命せられ
 し事業を爲すに堪ゆるの能力を以てし之を導くに種々異りた
 る道を以てし給ひしなり、されど若しエリサベスの心にして偏
 に神の聖旨に従ひ謙遜りて其指揮を俟つにあらざりしならん、
 神の聖算も少くとも彼に於ては行れざりしならん、

エリサベス、フライはルドヴヰクバーグの監獄検査官の許へ書
 簡を送り翌朝七時半を以て同所の監獄を巡見するの許可を得
 されを乃ち至りて之を見るに十八歳なる瑞西國の一青年は通
 辯者として既に出張し週の第一日なるに拘せらる女囚徒は國
 王の命によりて針仕事を爲し居れり是れ實は新教國の一大缺
 點なり、エリサベス等は夫より孤兒院を訪ひ夜になりて再び獄
 舎を訪ひしが女囚徒等は皆心を靜めて其講話をきき聖母朗讀
 には殊に感觸ある感觸を起せり一行の人々は夫よりフランク
 フォルトに至りキリスト信徒より大に好遇を受け監獄を防ひ
 聖書屋を市中に開き歩を早めてオステンドに至り其處より九
 月十二日を以てドバーに向ふて出帆し翌十三日安全に家に歸
 るを得たり、
 其後殆ど二ヶ月を経てエリサベス、フライはノルフォルクに至

リライオンといへる所にて其子クレスウエル夫婦の家に滞在せしとき夫婦の者は其長子を軍役に出さんとするを見しがこはエリサベスに取りて最怖ろしき事なりき蓋しエリサベスは其身を常に愛の空氣の中に置きしゆへ其正反對なる戦争を厭惡するは實に名狀すべからざる程なりを以てなり、

余之を家族の者に聴きしがエリサベスが國に兵隊あるを非難するの情を其子孫の軍役に出づる者あるを恐るゝの心は老年に至るも更に衰へざりしといへりさればエリサベス、フライはクレスウエル夫婦の企をききしとき左の如く記せり、

「われは身を怖ろしき不信徒の如く感へ寧ろ主の早くわれに此世を脱するの道を與へられんことを竊に祈願し初の中は孫の事件につきては何事も云はざりしが其後心氣稍復するに至りて彼及其父母に對してわが意見を語りければ皆深く憂愁に沈

みしが如く見へき」

幸にして此十七歳なる愛孫を最不信徒的の職に就かむる企ては遂に止みて其祖母に安心と慰藉とを與ふることとなれり、

新年に當りエリサベス、フライは左の祈禱を記せり、

「在天の父よわれらは爾の憐恤深き擁護の下に在り常に恩寵を被りしことを感謝し救主の名によりて尙ほ將來も共に在まゝ助けと恵みと聖靈の感化とを與へわれらをして榮光の爲に人々の爲に眞理擴張の爲に天賦の義務を盡さしめんことを乞ふ願くはわれらをして益々謙遜と忍耐をもて爾の子女たるに適する行爲をなさしめたまへ、ア、聖なる神よ爾はまたわが親族及凡て爾を敬愛する者殊に其或は悩みに陥り或は誘ひに過へる者を保護し且未だ光を見る能はざる者には爾の恩恵深きまなことを注ぎ彼等をして爾と子を認むるに至らしめ陸と海と

を問はず到る處に設美の驛の充ち満つるの日を早く來らせ給はんことをアーメン」

エリサベス、フライは未だ大陸旅行を始めざりし前に當り獨逸にも行かんと思ひしが折悪くして遂に其目録を果す能わざりき、されむかれは本國にて朋友等にも謀り再び傳道の路に上ばりて其素思を遂げんとし其親友ウヰリアム、アーレン氏も神の使命を受けて之と同道せんさせり、但し其出立前に於てエリサベス等は數多の慫慂をなせり、今其日記によりて之を讀者に告げん

「千八百四十年一月 此頃は公私とも實に多事の時なり、女王ウヰクトリア陛下はアルバート親王と結婚せられんとす、陛下は又ロルド、ノルマンデーに托してチエール、レーに於けるわが避遁所に金五十ポンドを下賜をせられたり、政治上の出來事には

ウエルスに一揆の起るあり、宗教上の騒動には國教を脱して羅馬教に歸せんとする者あり、又不信徒は社會主義を唱へてますます勢力を占めんとす、」

「二月一日アプトン 今日ウヰリアム、アーレンと共に女王陛下の閱見を許されしがサムエルも件はざりしを惜む、われらはキングダム殿に行きて暫時陛下に見へしが内務大臣ロルド、ノルマンデーは紹介者となり陛下にはわれらが大陸旅行の事を尋ね數年前われを見給ひしことを語り且先きに五十ポンド下賜せられしカロライン、ニユーヴの避遁所の有様を問はれぬ、是によりてわれは初めて陛下に咫尺して謝意を表するの折を得其種々の慈善事業を奨励せられしことを深く感謝し、われをして「舒恤者には爾舒恤ある者の如くすべし」といへる聖書の句を想出さしむる旨を奏上し將に其場を退かんとするときわれは

常に神の祝福が陛下とアルバート親王との上に下らんことを祈願せる旨を陳べぬ、

出立前ロンドン或は其近傍にて會を開くの必用あらんと思ひしに數多の困難は之に伴ひ殊にわれは婦人の身として聖書の命する範圍を越へて分外の事を企つるを大に恐れざるにあらす。雖聖書を決して聖靈の指示に逆ふ可からざることを明記せるが故にわれハ主の導き給ふことは何事も皆熱心に主の名の爲になさんと欲せわれ又之を使徒パウロの言に徴するに婦人が祈るとき又は豫言する時の心得を云ひしも其聖靈の助けによりて説教することに就ては少しも非難せし跡を見ざるあり、」

フレンド友會徒ならずして此會に臨みし人は數日の後其書簡に記して云はく、

「高壯美麗なる圓形の會堂を千五百人許の會衆を以て充滿し實にゆづらしき盛會なりき、フライ夫人は先づ會衆の爲に熱心なる祈禱を捧げしが余は筆拙くして如何に余が情の彼が祈りと共に動きしかを記す能はざるなり、夫人は祈禱を了へて暫時余等と靜坐しウヰリアム、アーレンはやがて立ちて説教、次に又夫人は「死より甦りし者の如く己を神に獻ぐべし」といへる題にて優美にして活氣ある説教をなし聽衆に與ふるに非常なる感觸を以てせり、殊に其青年に對し身を犧牲として神に獻げキリストによりて全く造り更へられ怡も死より甦りし者の如く凡て舊物をすてゝ新しくなるべきことを説き且之を爲し得る者は唯大能の神のみなること及されらが身を神に獻ぐるの必要なることを語りしが余に一一其語を心に感銘して遂に神のわれ

らの中に在まし給ふことを感ぜり、
 出立の用意も已に整ひ大陸に行きて働くべきの道はいよく
 明けしかるエリサベス、フライはウヰリアム、アーレンのみなら
 ず愛弟サムエル、ガーチー及其娘エリサベスとルシー、アラッド
 シヨウをも伴ふて行くこととなせり、蓋しエリサベス等は已に
 年老ひて精神の活氣は少しも減ぜざるも肉体を從來より大に
 衰弱して此二青年の助けを要しを以てよりジョシニア、フォ
 ルスターも亦之に加はりオランダに向て出帆せしが同地に
 達してエリサベス、フライは書を家族の者に送りて云はく、
 「われらは幸に清明なる朝に逢ふて心身共に快活を覺へ體
 かに正路の中に在るを覺ゆ又ベルヂアム政府よりは其監
 獄を巡見すべき旨をいひ來りわれらが働きの道へ到る所
 に開けぬ尤われは凡ての服役をば盡す能はず爾、西北の天

を仰ぎて故郷の愛人をしてのびざるにはあらざれども幸に神
 の恩恵は不肖の身に加はり幾分か神の爲に働くの榮を得
 て日々爽快ある思をますが如し、

二月二十七日

オランダにて、

われらは週の第七日午後二時半をもてセントを立ちしが
 其前飾ろしき監獄を訪ひぬ、先づ入りて所々を巡見するに
 中に一牢舎あり板の間も四方の壁も皆角木をもて造り囚
 徒は坐臥するも進退するも常に苦痛を受くべき様になり
 居りぬ、われらは又瘋癲病院を訪ひしが万事能く整頓して
 不足なる所なく其内に在る患者は皆セントビンセント、テ、
 ポールの姉妹といへる婦人會員の厚き看護を受け極めて
 幸福なる日を送るが如く見へきわれらはセントを出でし
 より稍徐かなる旅行をなして午後六時に此地に若きぬ、

三月一日

アラワセルより」

「今日五時頃ハンノバーを去りぬ、われらが其地に至りしは週しゅうの第五日にして第六第七の兩日にふたひに左程爽快さほどさうくわんなることもあらざりき、われらは一の監獄かんごくを訪ひしが未決犯みけつはんの囚人等は實際じつざい犯し、さ否らざるに關せず其罪つみを自白じはくするに至るまでは鐵鎖てつさに縛られて地に捨て置かれしを見たり、又數人の有志家ゆうしつかはそれが旅館りやくかんを音づれ第七日の夜は一貴人の家いへを行きて職見しやくけん高き人々に會ひ監獄の事につき種々緊要しゆんぐんやうなる談話だんわをなし、第一日には人數少き會を開きしが稀まれなる好結果かうけつぐわありき、夫よりわれらはこの地に在るは最早今日のさきかなりと思ひて人の來訪らいぼうを許せしに郡長ぐんぢやうは來りて監獄の事を談し其他多くの來訪者あり夜に入りては又聖書朗讀せいしよらうだく會を數人の者と開き嚴肅げんしゆくに會を開ぢてハンノバーに於ける缺點けつてんを語りぬ、われは今迄云ふことを忘れしが此時このとき島

后陛下こうへいかの典侍てんじは來り陛下へいかは第二日の午後一時を以てわれらに謁見やくけんを給はりたき旨めがねを傳へぬ、思ふにわれらを生來未だ斯かかる寛待くわんたいを王者おうじやより受けしことなし先づ宮殿きやうでんに至るや鄭重ていぢゆうなる禮式らいしきをもて客間きやくかんに通され、典侍てんじと他の三貴女さんきよじよと共に其處にてわれらを迎へ暫時せんじにして陛下へいかより謁見やくけんすへき旨めがね下りぬ、但し王は不快ふくわいにして見ゆる能よをさざりき、是に於て謁するに陛下へいかは身の長高く容貌ようぼう麗はしき御方みかたなりしが直ちに其心中しんちゆう平靜へいせいならざる旨めがねを語られ、われは踵つしむて之を慰め奉りぬ、次で陛下へいかはわれらに坐まを賜ひ種々の談話だんわをなし貴顯きけんの陪ばいり易やすき困難こんなん誘惑ゆうわく其感化かんくわの世よに必要なひつやうなること及び聖書會社監獄等の爲に助力じよりよくせらるへき事等を語られぬ、夫よりわれらは獄舎ごくしやの爲に奔走ほんそうせる婦人等を保護ほごせられし旨めがねを認めし上奏文じやうそうぶんを読みしが其中には陛下へいかに對し國王

に對し又皇子等に對するわれらの願ひをも入れぬ、次にわれは數卷の書を献上せしが陛下は欣然として皆之を受け給ひぬ、

ベルリンに至りてエリサベス、フライ等は貴族皇族等の觀迎を受け幾多の緊要なる働きは路を開いて之を俟てり、殊に故の國王の實妹ウヰリアム皇女は熱心にエリサベスを助けて監獄事業の爲に働かれたり、此皇女は素より貞誠なるキリスト信徒にしてウヰリザ皇后の死せし後之に代りて國王を補佐せられし人にして實に有徳の貴女なりき、
エリサベス、フライの姪の書に云はく、

伯母の其慈善會を初めて十三日の夜に開きしが旅亭に大なる室ありて二百人も入るゝこゝを得たり、

此大なる室と購置もありてエリサベス、フライ等は通譯者ト

ツク教授と共に其上に坐せり、エリサベス、フライの姪は云はく、

伯母が立上るや講壇の人々は皆視線を之に注ぎ非常なる熱心をもて其演説をき、ぬ、但し其前に當りウヰリアム、アイレンはわれらが傳道の目的を語り且つベルリンに來りてよりの働きを少しくいひぬ、

ウヰリアム皇女は伯母の組織せし獄舎矯風婦人會を喜び之に批准を與へて其稱讚に意を表はさんがために會員等を悉く其宮殿に召ひ集め且他の親友をも招きしかば四十人餘りの客となりグロイベル伯は通譯の勞を取られぬ、われらが皇女の觀迎を受けて殿に入るやチャールズ皇女は已に來臨せられ皇太子及皇女も間もなくして入御せられ伯母は安樂椅子の中央に坐して、皇太子皇太女及チャールズ皇女は其右に坐せられウヰリアム皇女マリー皇女ワア

トリスキー皇女ハ其左に坐せられグロイベン伯は通辯
 せんが爲に伯母に近く其坐を取り、われはシリフエン伯
 爵夫人の傍に居りしが夫人は極めて快活なる人にして大
 にわれらの事業に同情を表しぬ、伯母の前には案あり其上
 にわれと伯母にて起草せし婦人會の規則を載せポーレン
 伯爵夫人は之を獨逸語に譯して會衆に讀み聽かせ、次に伯
 母は精細に英國に於ける婦人會の談話をなし、要務終りて
 伯母は聖書を讀まんことを請ひグロイベン伯は獨逸語の
 聖書を取り伯母の望める以賽亞書の或る章を開きて之を
 讀みぬ、其後伯母は「皇太子皇太女兩殿下は暫時祈禱するこ
 とを許させ給ふや」と問ひしに、殿下共に之を諾して立上
 られし、伯母は跪きて熱心なる祈禱を捧げ、上は國王よ
 り下は獄舎の罪人に至る迄皆神の祝福を蒙らんことを乞

ひ、殊に皇室の爲に懇篤なる祈りをなし次に婦人會の爲に
 其事業のますく、榮えんことを乞ひぬ、右終りて婦人會員
 等は皆辭し去り皇族方と残り居りしはわれらのみとなり
 し、が彼等は皆われらがベルリン滞在中再び訪問せられた
 き旨を語りて厚く別れを告げぬ、

エリサベス、フライ等はドイツセルドルフを立ちてカイセルベ
 ルトに至り牧師フリード子ル氏によりて建られし女執事の養
 成所を訪へり、蓋しこの養成所に入りし婦人は重もに看護法を
 學び病人に侍して肉体上の要求を充たすと共に靈魂上の助け
 をも爲すを其目的となせしなり、尤此養成所は僅に四年間繼續
 せしのみなりしが其効果は夙に世の認むる所となりて人々皆
 其成行をきかんことを願へり、

「五月十日 ダッセルドルフ 在天の父よわれは信仰の快後せし

傳七章を讀み一人の牧師は之を獨逸語にて讀み直しわれは直ちに立ちて語り始め獨逸國の過去の歴史と現在の有様とを述べ、過去に於て蔣さし種子の極めて善良なるに何故に尙多くの果實を今日に收むる能はざるかとの疑問を起してわが信する所の答を之に與へぬ、即ち第一は人々の冷淡なること第二は不信徒の學問の切に人目を惑はし、こと第三は迷信の未だ止まざること第四は世人がキリストよりも却て世の物を愛すること是なりき、われは弊害と其結果とを陳べし後之が改良策として能く己の家庭を顧みて妄りに他人を批判せず神の保護と扶助と指揮とを受けて狭き道を進み聖書の語を聴くのみならずして實際に之を身に行ひ全心全力を擧げて神の服役に供するの必要を説きぬ、ウヰリアム、アーレンは續きて好き説教をなしわれは先づ熱心に會衆の爲に祈り夫より立ちて聖書の研究家

使徒行傳二
〇四十六

庭の禮拜安息日を大切に守るべきこと等を語りしがフリードネル牧師の通譯も極めて好かりしとさめ大に會衆の心に通徹せしと見へ皆非常の熱情をもて之を聴きぬ、思ふにこぼれらるが此地になし、働きの神聖なる印にして終生忘る可からざる者なり、而して其基く所を考ふれを一事として神の恩恵ならざるはなく神は常にわれらをたすけ殊に卑しき日が身をも捨てずして此の非常なる平和を與へ給ひぬ、ア、た、ゆべきを神の聖名なりさればウヰリアム、アーレンも、サムエルも、ルシー、フラッドシヤウもわが姪も皆欣然として愉快に堪へざるが如く見へき、われらは夫より食卓に就き感謝をさ、げて食事をなし、が皆慥に「歡喜と誠心とをもて食を同一にぬ、」
エリサベス、フライ等が旅行も爰に殆ど其終を告げ幾多有益なる集會の結果により皆同情同感をもてます、堅く相結合せ

られしが如し、ウヰリアム、アーレンは其日記中にエリサベス、フ
 ライが傳道上の働き其勢力及結果等を詳しく記し置けり、
 「五月十九日アフトン 昨日は年會の(牧師長老等の毎年一度ツ
 集れる會なり)初集に臨みしが唯黙坐せしのみにて何事をも
 なさざりき、神よ願くは爾の聖靈をもてわれを扶助せわれをし
 て此年會に臨み或は若人に對ひ或は青年に對ひわが感ずる所
 わが思ふ所を十分に平易に且明瞭に云ひあらそすことを得せ
 しめ、又之を語るに當りてはわが心を満すに信仰と愛と赤心と
 深き謙遜と聖なる熱情とを以てせられんことをアーメン、近頃
 聞く處によれど魯西亞政府はわれらが改頁策を監獄に實行し
 囚徒を宗教上の教へを受け周到なる監督を被むる山にて實に
 われらの満足に感ずる所なり、又デンマークの女王書簡をわれ
 に送りてわれらが其國に行々ざりしを悲み音にわれを見んこ

とを熱望するのみならずわが數多の意見に同意なる旨を云ひ
 ぬ、

エリサベス、フライを雇人の病床を見舞ひ其苦痛の狀及最後の
 有様等を実視せしゆへ通常の雇ひ看護婦より全く異りて數等
 之に勝れる看護婦の世に必要なるを費り、且牧師フリードネル
 氏と交りて或は直談により或は書簡によりてカイゼアペルト
 に於ける看護婦養成所の事を聞き殊に一度は親しく就きて其
 實況を見しかば頻りに英國にも同様なる者を建てんと苦考せ
 しが事務繁多にして直接に之に當るを得ず、遂に妹エリサベス、
 ガーチーが其娘等と共に之に奔走して先づ規模の狭小なる者
 を興し、ドアツデアー女王之を保護しイングリズ夫人之が校長
 となり校務は凡て委員に任ずること、なし、が漸々盛大とな
 るに至れり、

第十一章 自千八百四十五年

エリサベス、フライは曾て歐洲大陸を旅せしとき未だ其服役を盡さざりしを感ずて千八百四十一年七月の末の属する會の許可を得て出立せり。

「七月三十日アプトン・多くの困難と障害は漸く去りてホルランドセルマニープロシヤデンマルクに行くの途わが前に開かれ、明日兄弟ジョセフ其女アンナ姪エリサベス、ガーチー及び婢一人をも引連れて此地を出立することを得る故に此世の愉快をすべて皆得らるべし、且つ主は自からわれらを其服役に召し給ひしことなれば必ず行くものも家に止まるものをも共に祝福し給ふことを信す、めぐみある主よ願はくそ爾の裕かなる愛を以てわが信するごさくなし給えんことを。」

この一行は七月三十一日ロッターダムに若しこゝにて安靜な

る安息日を守り其夕旅舎の一室にて大なる集會を開き翌日牢獄を見八月二日ヘীগに向ふて出立せり、

七日彼等はアムスターダムニ若しこゝにて四日間止まりて牢獄等を巡視し宗教及博愛の目的を以て諸會を開けり、また風癩病院をも訪ひ極めて悲惨なる狀況を目撃せしが其一は不幸なる婦人にて肌に纏へる一片の布も無く草蓆の上には屈して居りしがエリサベスを見てその容貌に同情のあらはれしを視しとめが或はその聲の温和なるをきゝしためか知らざれど鎖のゆるすかざりすりよりてエリサベスに其手をさし出さんことを乞ひければエリサベスも其願の如くせしにかれはこれを再三接吻して流涕し悲嘆の状を表はせり、ア、この状を目撃するもの誰か能く彼は己に人間の感情を失ひて温和なる待遇に逆せざるものになりはてしといふを得べき、

十四日フリーメンと云へる繁華なる一邑に若し安息日の朝ハ靜穩に閉居せしが夕に至りて旅舎に程近き美麗なる建物なりし博物館にて盛大なる集會を開きしが開場の時限前よりしてよき装ひなせる人は々々集ひ來りまた數名の牧師も出席し會終るや其中の一人を立あげりて傳道者なる兄弟姉妹に對し今迄われらがなすところは皆人々の祝福さふり且つわれらの祝福さもならんことを望むさうるをしく述べ、且つエリサベスに對ふてハ其高名を己に永くわれらの欽慕せし所なりと云へり、其後キリストを信する一紳士は書をエリサベスに寄せて「爾は此邑の祝福たりまた地の盡たらんために神より遣はされざるものなるを今ハなほ深く信す」と云ひしとぞ亦以て其歡迎の一斑を知るに足らん、翌朝牢獄を見分しエリサベスと其兄弟と一の意見書を草して之れを當局者に呈せり、

エリサベスの一行出立せんとして馬車を旅舎の門前に來りければ下流の人々は其周圍に群衆してかれらが旅行の平安を祈り前夜の有益なる集會を謝し小冊子を乞ひあるものはエリサベスの握手を得るまでは其場を散ざりき、
 うれよりハムブルグに到り朝は牢獄等を見分一夕はエリサベスか交際のために用いて専ら宗教及慈善に關する問題を討議し或は禮拜をなせり、
 夫よりこの地を立出でバルチック海を航してコーペンヘーゲンに到りこゝに一週間足を止めて後郵船に乗込みしが八月三十日エリザベス、フライとその家族に書を送りて曰へらく、
 「われらハ主の恩寵を蒙り能力のあらん限りわれらが使命をつさめし後安き心にてデンマルクを出立つことを得しがかゝる大切に於て趣味ある使命にと未だ會て召されし

ことなしさてわれらが港に若きときは安息日なりしが英國公使館の秘書官ピーター、ブラウン氏ハ我等を迎へて女王は己にわれらの爲めに宿所を皇族旅館に備へ給へりと告げぬ、

翌朝女王ハ邑へ出御せられられは快よき満足なる露見をなすことを得たり、女王ハ天性快活ある眞のキリスト信徒にして篤き信仰あり容貌優しく女王の風采を具備へ給へり、而してわれに陪乘を許してその幼稚園に伴はせ給ひしが女王の兒童等の間にありてわが云ふことを通譯せらるゝさま實に麗しく見へけり、かくして二時間程女王と共におりし後旅館へ歸り其夕べも壯麗なるフレデリックスブルグの王宮を訪ひしがこゝハ佳勝なる位置を占め水陸の絶景と其周圍よある鬱蒼たる樹木とを云ふ可からざる風

我を添ひり、
 翌朝にハ例の如く牢獄の巡視を始め甚だ悲むべき状態を
 目撃せしが其中特に目せられしが注意を喚起せしものはキリ
 スト信徒の迫害を受けることにして彼の浸禮派の傳教師
 の中にて非凡なる人々すら尙牢獄の中に呻吟し國に信教
 の自由なれば他の人々も大なる虐待を受けつゝあるを
 見たり、
 國王と女王は甚親切にしてわれらを連日の第五日に離宮へ
 招きて陪食を命ぜられれば多くの意見をも王に奏上する
 の好時機を得たり、即ち西印度の奴隷迫害を受けしキリス
 ト信徒及牢獄の状態につきて陳ぶるに實に大切なる時
 と思ひ密に種々意見を配り居たれをわれを挽回せる風景の
 美も忘れし程にして三時十五分頃離宮に達せしが女王は

仁愛と寛容さを以てわれらを迎へ外邊の壁障もなき美麗
 なる庭園にわれらを導きて散歩し英語或は佛語を以て樂
 しみ談話を交へ、後應接所にて王に謁せるに王はさゞ數名
 の従者をまたがへ頗る優しくわれらを迎へ給へり、やがて
 食時の報ありて皆席につきわれれば王と女王の間にはさま
 れしかを何さなく究屈に覺へしがわが不完全なる佛語を
 たよりに漸く其時を過すことを得たり、間もなく食時も終
 りてわれら王と女王とに導かれて客間に通りしに其窓よ
 り女王の設立にかゝる高大なる孤兒院の見えければこれ
 を時機として牢獄の状態を王の前に陳上、またこの王宮に
 出づるまへ是非奏上せんことを期せし一の請願ある由
 をも申上げ夫より孤兒を訪問して樂しき時を過せり其後
 兄弟ジョセフハ王と便殿に入りて一時間程も西印度島の

状態を弄上ししれと女王とともになりしが暫時の後王等の側(かたわら)にゆき牢獄に呻吟(しんげん)せる浸禮派(しんらいは)の信徒(しんとう)の爲(ため)及(およ)び信教(しんきやう)の自由(ゆう)の爲(ため)王(わう)に請願(せいぐわん)をなし、可成(なるべし)僅(わずか)かの會話(かいわ)を用(もち)ひしもわが意(い)を盡(つく)さんがため充分(じゅうぶん)語氣(ごき)を強(つよ)めたり云々(いんいん)」

「千八百四十一年九月三日ハムブルグ 我等(われら)は昨夜(さくや)をもてこれらの諸邑(しよゆ)に於(お)ける働(はたら)きを終(お)りしがこの働(はたら)きは種々(しゆんしゆん)にして特にこの緊要(かんやう)なる大都會(たいとくわい)にては其種類(しゆるい)多(おほ)なりき中(なか)にもわれらは宗教(しゆきやう)上の迫害(はくがい)には強(こ)く抗(かう)し宗教(しゆきやう)上の寛容(くわんやう)と基督(きりすと)教會(きやうかい)の一致(いちじ)を扶持(ふぢ)し牢獄(らうごく)の改良(かいりやう)を圖(はか)り多くの弊害(へいがい)を除(じよ)去(せ)せんき力を盡(つく)せり而(しか)して人々(ひと)と共に享(う)けし親愛(しんあい)と交接(まじはり)とは實(じつ)に非常(ひじょう)なるものにしてこれを精神(せいしん)的にいへる多くの父母(ふぼ)兄弟(けいだい)姉妹(せいまい)とされに與(ま)へらたわれら何處(いづこ)に至(いた)るも補助(ほすけ)者(しや)となるものは常に起(おこ)されぬ」
エリサベス、フライハ千八百四十一年九月獨逸國(どいつこく)フイシニヌマツ

クより其孫等の許に書を寄せて曰はく、

「われ日記(にじき)を記(し)すよりはこのたのしみ處(ところ)より一書(いつしよ)を病等(びやうとう)に送(おく)ることを欲(ほ)し、われ身體(しんたい)を健康(けんこう)ならざれども心に於(お)てを寝(い)ぬるも醒(さ)むるも常に平安(へいあん)を感(か)じ、體(たい)に主(ま)はるが靈魂(れいこん)を念(い)ひ給(たま)ひしことを認め(みと)め主(ま)と身體(しんたい)をも念(い)ひ給(たま)ふならんを信(ま)ずるなり、さてわれらがいま居(ゐ)るところの如(ごと)き好(よ)き風景(けいけい)の他(ほか)にあることは未(いま)だきかざるどころにして蒼々(そうそう)たる山嶽(さんかく)の間(ま)に壯麗(さうらい)なる宮殿(きやうてん)樓閣(ろうかく)の散在(さんざい)するあり、こゝに居(ゐ)る住(す)するものを舉(あ)ぐれば王(わう)ありウ非(う)リヤム王子(おうじ)フレデリック王子(おうじ)其他(ほか)諸(しよ)王子(おうじ)諸(しよ)王(わう)女(によ)ありまた王族(わうしやく)ならざるものあれども概(がい)すれば皆(みな)キリスト(きりすと)信徒(しんとう)の家族(かぞく)あり、まゝ眼(まなこ)を一方(いっぽう)に轉(てん)すれば多くのスイツル風(ふう)の小舎(せうか)よりなれる一大(いちだ)村落(そんらく)あり一小(いっせう)植民地(しやくみんち)にして其(その)住民(ぢみん)は新(しん)教徒(けいとう)なりしたため激烈(げきれつ)なる

追害を受けツイラーサルより逃れて此地に來りしがプロ
 シヤの先王は彼等にこの山にかくも麗はしき小舎を建つ
 ることを許可せられざるなりさればかの燦爛たる宮殿に
 もまたかの清雅なる小舎にも共に主イエス、キリストの忠
 實なる婢僕の多くあるを見て一大快事と思はざる者はあ
 らざるなり、
 われ今夕はかの貧者にも富者にも共に母たるのリーデン
 伯爵夫人の邸宅にて一の集會を開きて誰人にも望むも
 のなして連ならしめんとす、われ昨日この夫人の許に聖應
 を受けとり思ふにこの宮殿は質朴なる田舎の風雅なる建
 物にしてこれにすぐるものなく、先づ客間の如きは夥多の
 盆を以て飾られ宛然煖室の如く其窓よりと疊々たる山
 嶽を眺むるを得るなり、

われらまた王族の數名と共にウヰルヤム王女に招かれしが
 女王も其後きと給ひ、王がこの國にて宗教上の追害を禁
 せられ且つ他の多くの善政を行われはわが嘗てこの地
 を訪ひし以來のこゝとなりき、てわが喜ぶを見給ひ殊の
 外満足に御思召し給へり、かくの如くわれらが他人の幸福
 の爲めに謀るところは皆神の祝福を受くるを見れば大なる
 慰撫ならずや、願はくはわれら全力を盡して神を讚美せん、
 昨日はこれらと甚だ有益なる訪問を女王及ホルランドの
 フレデリック王になせり、フレデリック王の妃はプロシヤ
 王の姉妹なるがこの妃ともまた女王とも緊要なる問題に
 つきて懇談することを得たり、今日は早朝にはリーデン伯
 爵夫人の聖應を受け午後は皇女ウヰルヤム其女メリー島
 女他の數名の人々と共にわれらに逢へり、若し爾等にして

この皇女及其姉妹を見ることを得ば必ずその聖にして
 敬を受くるの地位にありながら甚自遜にしてすべてのこ
 とも節制を旨とす總べて大陸の貴婦人は英國の人々より
 其服装質素なるがこの皇女の如きは性頗る寛大なりさ
 いへ一も冗費の跡なく高大なる要應にも酒類を唯一種を
 用ゆるのみ其他は皆これに準ずかれと特にわれらが爲に
 林檎菓子を供へられしがろと珍らしくして風味甚だよ
 りき人々は凡て食事の前後に祝詞をなすことなきも暫時
 起立して沈黙するを常とせり、

午後 我らはいま王子ウヰリヤムの邸より歸りぬ其處に
 て甚だ有益なる集會開かれ牢獄に關するわが経験の談
 話を聞かんとて多くの貴婦人と集まりしが爾等の叔父も

西印度の旅行の談話をなしぬ而してわれらとかれらの上
 に神の優渥なる祝福の下らんことを願望ふむれをのべけ
 ればかれらほうの愛情をわれにあらはしてわれは自から
 賤しきものなりと感ずるにも拘らず怡も姉妹の如く厚
 く遇せられたり夫より歸路王に逢ひしが王は今夕リーア
 ン伯爵夫人の邸宅なる集會に臨まるべしといへり、

週の第二日の朝 われと昨夜十一時頃伯爵夫人の催ふせ
 る有益なる集會より歸りぬさて其會には王族貴族も多く
 集まりしが少しく後れて王も女王も臨まれかの迫害に遭
 ふてブイラーサルより逃れてこの土に來りて憫然なるチ
 ロリス人も多くつとひぬ思ふにかく上下貴賤の一堂に
 會せることはいづこにも其例なきところなるべしわれこ
 の會に列してなんさなく心慰しけれを頗りに助けを神に

新りたり却て日耳曼語の讚美歌を以て會を開き、
 父ジョセフはわれらが禮拜に關する主義を暫時設き、
 及先王の難に洗めるテロリス人を救へることなど
 を述べ、愛をもて人々に眞理を説く爲に神の扶助を受けつ
 るあるを心に感ず、
 動せる様をばし、
 り、
 王も、
 るものなるを、
 を、
 ん、
 をわれらハ伯爵夫人と共にかれのため又其姉妹のため及

撒母耳前書
 二〇三十一

すべて主の服役をなすもの、
 親愛ある孫等よわれらもし主の服従をなさん欲は、
 くら、
 こそを、
 さいへり、
 は必ず、
 つも、
 フランク、
 まんことを、
 近づ、
 願等をも、
 願はくと主は、
 はらんことを、

の父と母とに愛をなぐる、

親愛なる祖母エリサベス、フライより、

永き間漸く衰微せるエリサベスが健康いまはなほ更にをとろへ

まかばオステンドへ行き十月二日解纜してドーヴァーに着し

其夫の迎ふるに選ひラムスゲートにてうの長女の看護の下に

身を止め苦痛の去るをまち又長男ウヰルヤムはこのときアブ

トン、レーンに住ひしがこゝにもエリサベスハ二三日止まり、夫

より少からぬ困難をもてノルフオルクに到りぬ、

エリサベスは高貴の人々より大なる尊敬と厚遇を受けたる

大陸の旅行をなし、のち人より出づる名譽を願はずして唯

神よりのみ出づる謙遜の伴へる榮光を願ふに至れり、

エリサベス、フライ歸郷の後間もなく其親友に送りさる書状の

中に身体の衰弱につき書して曰はく、

「われらは皆わが健康をば偏に神に一任せんと思へり、蓋し

神をわれに最もよきものを知りまたわれによしと見給ふ

ときハ立處にわが病をも愈し能ふべければなり、且つわが

苦痛ハいと微かにして多くの平和と安静とを得しは實に

大なる恩恵なり、尤もわれ屢次世の煩勞より逃れて暫時休

息することを得ば大に好むと雖も時としては多くの堅制を

蒙り苦難に呻吟するものゝ爲めに働くを得んため健康な

らんことを願ふともあり、されさまた乍にしてをべてのこ

と神に任かせんと思ひ直さざるはなし、蓋し神はわが如き

不完全なる器を用ひてなざるゝことをまたこれによらざ

るもなし給へをなり、而してわれハ自から神の與へ給へる

仁愛憐憫慈惠及信實を表するの價直なき記念碑なりと感

す、

「十二月五日アプトン(週の第一日の朝) われ恩寵により過る二
 三日間は大に快くなり時々苦痛を感じることもあれども頗る平
 安になりしと深く天の父に謝するところなり、われは這回の疾
 病をば必ず特別なる恵みなりと感す、蓋し其間我が願望は恩寵
 によりて満とされたれをあり、」
 千八百四十二年の初の歴史は大緊要なる事業を以てしるま
 れたりエリサベス、フライの衰弱はなほ舊によりて變はること
 なきもかれが苦める同胞を救ふこと願望はこれが爲その熱
 度を減ずることなかりき、却脱去秋の項サーピロン、ピリーハロ
 ンドンの市尹に撰されしが其妻は曾て牢獄改其の爲めエリサ
 ベスを援けて其功少からざりしことあり、夫妻とも是迄常に敬
 虔にして基督の道を傳播するため其心を用ひ一人なりければ
 今この高き位置を得てエリサベス其他有力なる人々と交通し

るの博愛事業の企圖を開き力を添へてこれを成就せんことを
 希ふに至れり、さるほどにこの夫妻は或日を卜して妻の寓を
 張リアルバート王及行政長官を其邸宅に招ぎまた熱心を以て
 エリサベス、フライの出席をも請ひその多年共に懐抱せる問題
 を貴顯方の前に陳述するの機会を得せしめんさせり、是に於て
 エリサベスこれに承諾するの可否を熟考して曰はくわれこ
 のことわが身体のみならず心にも甚だ重大なるを感
 ず、されどもわれもし行かばわが道は明がになり主はわれと共
 にあり給わんことを信す、」
 「二月十七日、ア、主よ願はくは今日我等に近くいましわれら
 をして爾の教理を脩め、我しき事を語りて真理及仁愛の道を進
 歩めんことを得せしめたまへ、」
 「十八日(週の第三日) われ神のくだし給へる恩恵によりてが祈

薩のきかれしを見る、われ現内務大臣サー、セームス、グレイ、ハム
 と救助會等に就きて緊要なる談話をなし、が思ふにこれ大英
 シュンチエチー
 國會社のために第一階段となるものなり、外務大臣ロード、アバ
 ーデーンは現時大陸の狀態に關する諸般のこゝを話し、殖民
 大臣ロード、スタンレーには、撒爾殖民所と其所にある婦女の慘
 狀を陳べ、これによりて爾來交通の門戸を開かんことを欲へり、ま
 食事中は大概アルバート王とサー、ロバート、ピールと談ぜしが
 王に對しては子弟の基督教主義の教育につきて話し、神聖なる
 宗教的生活の必要を説き、これなくしては眞正の平安も繁昌も
 得べからざるを何れの社會に於ても見しことを陳べ、夫よりは
 歐洲の狀態及其諸朝廷カ基督教のますく廣まること我國の
 牢獄の弊害刑罰の嚴重に失すること等につきても述べ、其他わ
 る旅行諸國の風習生活の情態等につきても面白き談話をなし

サー、ロバート、ピールは重に牢獄につきて談し、獄吏の權重き
 に失し、刑罰正確ならず往々嚴にすぐるを述べ、仁恤の必要を説
 き、かれが新獄舎を巡見して其暗き獄房を改良せんことを請へ
 り、

「三月十五日アプトン わが子クレスウエルと其妻及數人の子
 供を携へてこゝに止まりしにうの少き子供一人は海軍に
 入らんさせり、われ基督教の主義に於て戦争には全然反對せる
 ものなればこの事は大にわが憂を感ましむるなり、」
 この孫を軍隊に入れんとの處置はエリサベス、フライが愁嘆の
 原因となれり、蓋しかれば深く戦争を憎み其感覺は之れを聴く
 だに忍びざればなり、
 身の薄弱と復雜なる境遇とは大にエリサベス、フライをして其
 氣を洗ましめたり、されども亦かれが憂はしむく自國又は外

國に於てなしと雑多なる働きの上に降されし祝福の報知續々
 到來するをもて大に勵まされたりきたとへわかのアンマード
 の如き牢獄の制度宜しきを得ず、惨憺なる状態を呈せし國もか
 れが盡力により主の裁可を得て有益なる大改革をなし、獄舎は
 新築せられ囚徒に緊要なる區別を作り之れに業務を興へ家具
 を備へて冬季には室を温むるに至り女囚徒の上に婦人の監督
 者を置き漸々他國の獄舎に用いられし監督法を採用して聖書
 讚美歌其他宗教書類をも十分に具備ふることを得たり、又王は
 かの散度忠實なる委員會の牢獄を訪問して其惘然なる罪人等
 を改良せんために組織せられしを賞して曰へらく「われらは仁愛
 に富める人にして囚徒の徳性と職務に改良を加へ彼等をして
 他日赦を得て自由に社會に歸るを得せしめんとの目的をもて
 牢獄改良委員を組織せるよしを聽きて大に満足を感じ、故にわ

れば彼等をして牢獄を訪問し宗教上其他の有益なる書籍を分
 布して囚人の上により影響をなせしむる爲めに哥んで便利を
 與へん」とい

リーデン伯爵夫人と書を寄せて牧師フェルトナーの満足ある
 成效を報ぜり、蓋し牧師そのの擔任せる囚徒の中に著しき變化
 を起さしめしなり、また四の徵治監をプロシヤに起されたり、即
 ち一はベルリン二はミュンスタル三はシレシア四はケニグス
 ベルグにしていつも王の特別なる差圖により實に稱讚すべき
 構造なりき、

エリサベスはまたドワッスエルより大なる改良は牢獄に施さ
 れ一の養育所ハ獄舎より赦されて悔改を表はせる少女等の爲
 に市の近傍に設けられしとの喜ばしき報知に接せり、これを報
 せざるもの日へらく「この養育所にて少女等は親切なる警戒者

の下にありて願負なる召使たるに必要なる仕事を學び世の評判も甚だ宜しく彼等が充分用意の終るときには直ちに雇れ口なきことなく雇れて後も彼等はよく主に仕へて正しき生活をなすを常とす而してわれらの養育所の結果の最も確かなる證據はこれより出でしものにして再び罪を犯すものと創立以來已に二年の星霜を重ねるも未だ一人もなきことによりて明かなりし。

ハノーヴァーの女王は基督教的慈愛心に富みエリサベスがハノルンなる囚徒等の爲に請ふところを喜んで其真人なる王に介して惻然ある囚徒等をして嘗て苦痛に堪へざりし重き鎖鎖を其身より除去をとを得せしめしがこはまさエリサベスが同情に富める心靈に大な慰藉を與へたり蓋しかれが其身体をも能力をも抛ちて事へたる主はかく著しくその手の働きの上に

祝福を垂れ給ひしなり、

エリサベス、フライは保養の爲め數ヶ月を海濱に過し十月の末に至り歸宅せしが偶々七才なりし孫を亡ひて家族の者の悲痛に沈めるにあひ深く其父母等に同情をあらはして慰藉せり母親は特に悲嘆に沈みしが遂に神の恩恵によりて従順に其の編理の鞭に服することを得たり又エリサベス、フライを墓所まで見送り式終りて人々の歸らんさするとき或者等に對ひて「これ神の聖意なり神のよしと見給ふところをなしたまふに任かすべし」と云へりさびやうの家族の一人群かに當日のことを記して曰はく、
其夕家族と皆一室に集まりエリサベス、フライを哥林多後書五章を讀み！後其處に連れる子孫其他の者に對ひて非常に力あるすべしめをなして云はく次の集金者來るときにはこのさられ

たる是は信仰ある小兒なりしを感謝するの禮物を出すよう準備すべし、蓋しこの子は贖罪の事實をキリストに由る罪の赦しとを特別に経験する溫柔なる兒にして其若き年齢に感して善行と慈悲とに富み貧民の愁をさへてはよく之を憐み其賞賜金を積みて一ポンドを得之をセイロウ傳道會社へ寄附せしことさへありて幼稚にも似すて已に好き實の花を開けり、されば彼を彼が爲に死にたるキリストによりて其果を天國に結ぶことを得べきや明なり」と、エリサベスは其他傳道事業に就きて久しく聽れるのち同席の人々の爲に熱心なる祈禱を捧げ人をして深く之に感觸せしめたり、

千八百四十三年エリサベス、フライは健康稍復せしかを再び大陸特にパリスを訪ふとは其義務なりと感ぜり、蓋し彼を先づろこにあるキリスト信徒と親しく接して出來得べくんば信仰と

希望をもて之れを固めんと願ひし故なり、是に於てエリサベスは友らの同意をもてかれが前度の旅行のさきに興へられし鷹書を携帯すること、せり、兄弟ジョセフ、ジョン、ガーチーもこれに伴ふと己の義務なりと思ひうの妻も之に随ひ敬友ジョセフ、フォースターも同行しなほ外に長女はエリサベスが身の看護の爲に従がへり、

パリスに駐在せる間に一夕總理大臣ギゾーは彼と食を共にせしが其時の談話の種は會て論ぜしことある問題にしてフランスに於ける新教徒の有様信教の自由黒人の奴隷等のことありき、またエリサベスは意をサントウサウチ島に注がんとことをギゾーに乞へり、蓋し同島の王カメハメハ三世を二三ヶ月前に書をエリサベスに送りて其嶋にアルユール性の飲料の輸入を禁ずるを補助せられんことを請ひ其飲料輸入の結果の實に愁

傷に送へざることを云ひしゆへなり、
 エリサベスが以前パリスを訪ひしより牢獄の改良は大に拂り
 この必要はまもなく社會の認むるところとなり遂にこれに關
 する議案を佛國議會に提出せらるゝに至れり、
 それよりエリサベスは歸郷して後ロンドンに開かれし年會へ
 も一二回出席し暫時の間ハ旅行前より身体は頗る健康なりき、
 「千八百四十三年六月二十五日 今週は最も繁忙なる週間なり
 週の第二日に大英國會社委員會は開かれぬこの會員ハ親愛な
 る婦人よりなり皆其心と目的とを一にしてキリストにより同
 心たるの著しき證據なり尤も其技藝は相異なるを免かれずと
 雖も其根本に至りては同一にして即ちキリストをないて一な
 り却て我れらはスタンレー卿のヴァン・ザ・メンスランドに於
 ける囚徒の爲め賢明なる處置をなすことを得しと深く神之感

謝せざるを得ず、蓋しスタンレー卿はわれが同牢獄の弊害を述
 べ且つ之れを救済するの策を上申せしものを悪るにきゝ入れ
 てこの成功を遂げしもの、如し、

傷に堪へざることを云ひしゆへなり、
 エリサベスが以前パリスを訪ひしより牢獄の改良は大に抄り
 この必要はまもなく社會の認むるところとなり遂にこれに關
 する議案を佛國議會に提出せらるゝに至れり、
 それよりエリサベスは歸郷して後ロンドンに開かれ、年會へ
 も一二回出席し、暫時の間ハ旅行前より身体は頗る健康なりき、
 「千八百四十三年六月二十五日 今週は最も繁忙なる週間なり
 週の第二日に大英國會社委員會は開かれぬこの會員ハ親愛な
 る婦人よりなり皆其心と目的とを一にしてキリストにより同
 心たるの著しき證據なり、尤も其枝葉は相異なるを免がれずと
 雖も其根本に至りては同一にして即ちキリストをないて一な
 り却説われらばスタンレー卿のヴァンデーメンズランドに於
 ける囚徒の爲め賢明なる處置をなすことを得しと深く神に感

謝せざるを得ず、蓋しスタンレー卿はわれが同牢獄の弊害を述
 べ且つ之れを救済するの策を上申せしものを悪るにきゝ入れ
 てこの成功を遂げしものゝ如し、

第十二章

自千八百四十四年
至千八百四十五年

千八百四十三年の夏より秋にかけてエリサベス、フライの身体
ハ大に衰弱し其子女等及妹バックストンの周到なる看護を受
け折々は最早活潑ある働きには召されずさいひまた時として
今回の疾病ハ本復の望なしさいひしか少しも失望せし様見
へず全く神に任かせて心安らかなるが如くなり、同年十月二
十五日の夜なりしが喜びのながれはかれが上に注ぎ聖書の句
を引きて信仰は愛と信仰より出づる實際の働きを伴さざるべ
からざることを證して樂めり、また翌日力をこめて云ひけるそ
「ラケルよわれた」とことを云ひうるなり、われ十七才のとき
心に鋭き感動を受けし以來眠より醒むる毎に盡なるも夜なる
も健康なるさきも疾病あるさきも未だ嘗てわれいかにしてよ
く主につかへ得んと考へざることをかりき「さいひは又其周圍

に侍せし人々に對しては感謝の念に堪へ難かりしにや頻りに「われはこの上もなくよく看護せらるる」われは小麥の最もよきものをもて養むるなご、云へり、かく人々の看護意りなかりしかば翌年三月の頃に至りてエリサベスは次第に快くなりその望によりて浴場に至り歸るに及びて大に快氣をまし、によりうの妹は七月二日エリサベスの許を去りしがエリサベスは多年腹食を共にして扶けられ特に今は衰弱の身に「あれを實に離別の情にたへざるが如く見へき、

四月八日エリサベスを病後始めてプラストンの會に臨み「主にありて死ぬる死人は福なり」と云ふ聖書の句につきて説き其死せし姉妹のことを述べ、以塞亞書の一句「なんぢの目さうるもしき狀なる王を見さほくひろき國をみるべし」を引きて其終りを結び熱心なる祈禱をなせり、されどまた大なる試探は同ト月の

默示録
十四〇十三
以塞亞書
三十三〇十
七

中に起り來りエリサベスの子息ウキルマムは猩紅熱を患ひ二三週を経て彼を其子二人と共にこの病の爲に犠牲とせられり、この實に大なる試探なり然れども未だエリサベスが多年鍛錬せる心を亂すに足らず、かれは其身の衰弱と斯る落膽との中にあるも決して屈することなくよく平素の習慣を守り時間を定めて雑多なる業務を取り朋友の親切なる招待には快く應じ且つ喜んで訪問を受けたり、あるときかれは其友の一人に語りて日へらく「わが生活ハ一大變化にして或は人間の目よりかくれざる通路を通り或は寂寞として人跡なき荒野にさまよひて住ふべき邑を見出す能はざりしも幸によく神に支へられ、こゝには實に奇異と云ふのほかなし」と、また云はく「われまをく、サ、フランチス、ペーコンの語を引きてわが感情を表はすなり即ちわれ人間の前には昇りて高くありと感ずるも神の前には遜

りて低くあるなり」と、五月の末つかたに至りエリサベスは其孫女エリサベス、フライを伴ふてロンドンなる婦人年會に二回出席せり、エリサベスハ是迄常にかゝる會に欠席せしことなく喜んで其事務をとり居さるも疾病の爲永く出席せざりしが這回年會の人々は再びかれの出席せるを見て大に満足に感ぜり、うれより大英國婦人會の年會にも連りロンドンに於ける牢獄はすべて改直せられよく整理せりとの報を得て大に喜べり、この夏の一部分をば愛子ウヰリヤムの子女等とラムスゲートにて暮し、九月に至りて親戚及子女等は多くエリサベスの家に集ひ來りて樂しき時を過せり、千八百四十五年エリサベス、フライは偶々集り居りし多くの家族の者と共にラムスゲートを距る四英里許なるドレーパースに

開かれし集會に行き死は近きに在りといへる題にて非常に力ある説教をなし直ちに罪を悔改めて之が備をなすの必要を説き、且つ會衆中にて最早生涯の日の十一時頃に達せしものあるを信するよしを語りしが實に其旨の如くなりき、次の週の第一日にもエリサベス、フライは同様なる説教をなし、

が此時が一子一夫婦は來りて其傍に居り、フヴォールよりも數人の貴婦人參合し殊にラムスゲートよりはサ、ジョン夫婦來りければエリサベスは大に喜びて之を懇談せり、二十九日に至り集り居りし家族の人々は辭し去りしが其前日の會は極めて嚴肅にして當日は敢て氣付かざりしも後其能く離別の集會に適せしを知れり、夫より數日の間エリサベス、フライは専ら良人と長女との看護の下に在りしが二人の力にてはなかく其意を盡す能はず女ラケルが家族を伴ふてノルフオルク

より来るに違ひて大に助けを得たり、此時ラケルは其母さは六ヶ月前に逢ひし儘なりしかを母ハ大に喜びてパイアー門まで馬車にて迎へ互に相見るに及て母の身の上に大なる變化ありしを視たり、別に苦痛の状も顧さず歩行も自由に食欲も進み夜も眠る能はざる等のこととあらざりしが顔色何となく蒼々として微笑だに願はさす十日以前より時々腦に劇痛を起すことありしなり、次の週の第一日にもエリサベスは常の如く會に臨みしがこの日家族の中に路の遠きとぬエリサベスに伴はずして他の公會に出でし人ありしかを歸るに及んでエリサベスは先づ平生の如く之に對ふて其好き集りなりしや否やを尋ね、未と已の臨みし會の如何を問はざるに「われらは非常に有益なる會に連り未だ日の暮れざるに當りて能く其務を盡くし何時までも主の召に備ふるの必要なることを深く感ぜり」と語り且

つ其日の内に幾度か之をいひ出して樂みさせり、又其會に連りし人は之を辭して非常なる天祐を受けしものなりと云ひエリサベスが「われらは皆已に準備整ひしか若し主にして今日われらに召し給ふもわれらの爲すべきことと全く了りしか残りし事は更になきか」といへる問を出し、こと及其重ねて「われらは實に死するの覺悟をなし、か」といひし時の極めて感觸かり、ことを語れり、

エリサベス、フライの常習を此時に至りても更に從來と變りしこと多く多くは書き物に日を暮し或は聖書雜書を要求して港中に碇泊せる各國の水夫等に之を頒てり
或朝病の非常劇しく發りしときなりし或人エリサベスの傍に侍して御身が此世を去ることを少しも悲まず、怡も當然の義務の如く思はるゝを實に驚くべきことなりと云ひしかばエ

リサベスエ之に對へてわれは万事皆神の聖旨を奉^{ほう}ト爲すべき
 の事業ある間は生^いきんことを願^{ねが}ふも若し之なきにわれは決^{けつ}
 て生^いくるを望^{のぞ}ますさいひ且つ若し最後の日來らば願^{ねが}はれる
 恐怖の念は全く取去られ神の恩恵によりていと容易に暗黒の
 谷路を過ぐることを得べしと信せる旨を語れり、
 十月十日即ち週の第六日の朝エリサベスフライは苦痛を忍び
 て一友人の爲に左の書簡を認めたり、蓋し彼はエリサベスの自
 筆を乞ひし故なり、

わが親友よ、

われは左の數句を御身の爲に寫しぬ、こは皆人若し救主を
 信^{しん}ト己を捨て、全く之に従^{したが}へば其愛と功にによりて必ず
 救^{きう}ひを受^うくべきことを証する句なり、望^{のぞ}らくはわれらは皆此
 救の數に加^{くわ}はらんことを、次にわれは御身の長き書簡に接

せんことを願ふ切なり幸にわか意を充さしめよ、終りに唯
 みわれは御身の常に平安ならんことを祈る

ラムスゲートよて

十月

親友

エリサベスフライ

「われら活る神を望む彼は萬人の救主にして殊に信する者
 の救主なり、」

提摩太前書四〇十、

「我もし地より擧^あげられれば万民を引きて我に就らせん、」

約翰傳十二〇卅三、

「此故に一の罪より罪せらるゝ事の凡の人に及し如く一の
 義より義せられ生命を獲^うくことも凡の人に及べり、」

羅馬書五〇十八、

エリサベスは先きに作りし日課表の續篇を編纂せんがため兼
 て聖書の採集をなし居りしが此書簡を書き終りてまた數葉の

拔書をなせり、こは實に彼が此地上に於ける最終の働きにむせ
 能く其臨終の状を顯はせり、勿論彼が肉麻ハ暫時苦痛を受け
 雖其靈と信仰の錫によりて堅く岩に結附けられ其太陽は輝
 々たる光を放て此世の地平線下に没し遂に彼世の永久二點の
 聖なき晴空に懸れり、
 エリサベスが聖書の句を選むに當り少しも目鏡を用ひざりし
 は實に驚くべきことにして彼は其眼の平生より大に善かりし
 ことをいへり、
 其後エリサベスと馬車に乗りて運動に出でしが不思議にもか
 體して平生樂みし海面の景色も見えず擦等が雜書を與へんと
 を熱心に讀ひしも更に氣付かず再三請するゝに至りて初めて
 之に應ぜり又箱田舎に入りしに牧童ありて傍に來り「終日仕事
 なきに苦むがゆへ若し讀む物を惠まれさ幸なり」といひしも

リサベスは更に之を知らず孫の雜書の包を取りて其手に渡す
 に至り徐ろに數冊を撰みて之に興へ怡も其心と既に肉に伴は
 ざるが如くなりき、
 斯かることありて後エリサベスの疾は漸々重くなりしは翌
 日は眞入と娘等は醫師の診察を受けしゆんと欲しデスタ氏は
 フロイドステアアスに居るを聞き使を遣はししが不幸にして
 氏は已に其地を去れり、
 週の第七日即十一日の朝エリサベスの早く醒しも腹に劇痛起
 りて床上に在り七時半頃に至りて一孫兒之を訪ひしかか命ト
 て詩篇第二十七篇を讀ましめ又殆ど半時間を経て他の孫の行
 きしときも更に先のことばをば云わすして再び之を讀ましめ、後
 ち徐ろに起きて衣服を着げしが唯默然として手に頭を支へて
 椅子に倚るのみ毎朝孫等の助けを請ふて身を養ひしも今朝と

之を晴らざるのみならず其不在なりとも覺付がざりしが如く見へき又エリサベスはアーサー、レノックス夫人の子女を晝飯に招きしが其入來りしをも知らず頬杖をつき苦痛の状を表はして空しく黙坐せり、其後レノックス夫人の其妹と共に子女等の迎へに行きみればエリサベスは之を客間に通して少し談話せしが彼等其不快の状を見て直ちに辭し去れり、其夫人及娘等は早く醫師の助けを得んとして色々に苦慮せしが午後五時頃に至るやエリサベスが死の鐘の聲に鳴り平生の如く其室に在りて安樂椅子の上で打臥し、家人の來りて之を爐邊の椅子に移さんとせしときは最早獨力にても移る能はず又椅子に就きても直坐する能はずして常に一方に凭たれ居り食盤の餘り運びしため傍ある客間に椅子を引き入れて食事を進めたり、食後には復安樂椅子に移らんとして二人の手に扶

けられども尙も二回地を仆れ一程衰弱し夫より家内中の盡力にて漸く床を就かしめければ極めて平静にして殆ど感覺を失へるゝ如き顔色をなして其上に臥居れり、尤も醫師の來りし時に其喜で之を過ひ其間にと正當なる答をなせり、思ふに其人の懇切なる看護をエリサベスに取りてハ大なる慰めなりしには相違なきも全身疲衰してまゝ如何とせざる能はず醫師も醫術之を助ひじかゞ更に回復の策なかりしなり、兎角する中にエリサベスの疾は益々危篤に赴き四肢は全く力を失じ如く見へ十二日朝六時頃に至るや急に下女を召して「アメリーは愛するメリーよわれを實に危篤なり」と語り、メリーが「妾も然か存ず最愛なる主婦よ妾も之を無知せざるにあらず」と對ふるや問もなくして又「わが爲に祈禱せよ實に苦痛なりされどわれは平安なり」と叫び尙續ひて語らんとせしが聲微にして

中より来るが如く感せられき、
 思ふに古來幾多の人々殊に女性の中に於ては未だエリサベス
 フライの如き神の召を被りし人ハあらじ彼は神命をうけて世
 の慈善事業の先導者となり滿腔の熱情を奮ひ全身の能力を盡
 して其使命を果し人なれば慈善事業の歴史中に於ては實
 に古今獨歩の偉人といふも敢て過言にはあらざるなりされ
 ど彼は凡ての事業を獨力にてなしにあらす宗教界に於ける
 種々の人々に之が助力者となりし者極めて多く中では已に
 彼が如く此地の服役を終へて永久の生命に入りし者もあり或
 は尙依然として神の偉徳の感化の下に懺悔或ハ罪人を矯正
 せんとし或は貧人を救助せんとする者あるあり
 されど爰に一の記憶をべきことあり即ち人は男女を問はず貴
 賤を論ぜば皆各其義務を有し之を爲には凡ての時と智と力と

を使用せざる可からざるに人動もすれば之を忘れ且つ能く其
 義務を盡すも則ち神の榮光を表はすの基なることにも更に注
 意せざることは是なり、

エリサベス、フライハ其經驗によりて凡て熱心なる婦人は若し
 一旦神の感化を被れば世の罪惡の激流を塞ぎ之を自由に左右
 するの力あるいと緊要なる器たるべきことを覺り他人に求む
 る所を皆身に行ふて其實例を示せり又彼の純潔敏敏として
 天の愛情を其中にたくへし心を以て腐敗と憂愁との谷底に沈
 みし人々を交り之に同情を表し之が救済を謀るは如何なる苦
 痛なりしか殆ど想像すべからざる程なりと雖彼は尙其身の衰
 弱して將に此世の旅路を終へんとするさまに當り一人の近親
 に彼がなす事業の獻身的なりしことをいはれわれそ之を獻
 身的事業といふ能はず却てわが樂みなりしなりと對へしこと

さへありき、蓋しかの波ぶべき罪人の爲に盡力するは實に彼が
最大の快樂にして人の永遠の生命の爲に如何なる疲勞をも
辭せず如何なる艱難をも厭とざりしなり。

エリサベス・フレイヌ傳記

明治廿六年十一月廿三日印刷
同年 月廿七日發行

譯者兼
發行者

水野忠九

芝區三田四國町二番地

印刷者

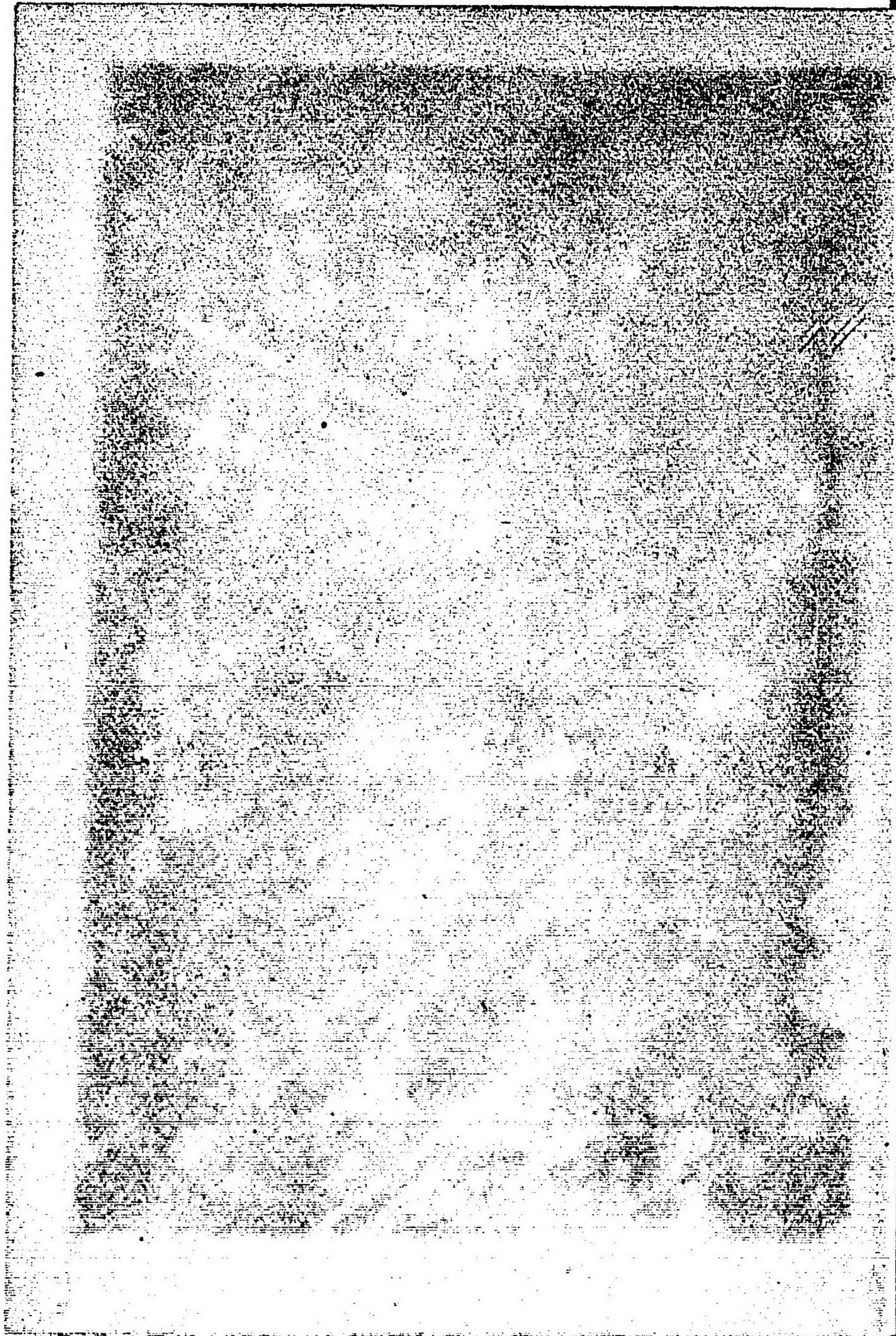
石崎安藏

芝區宮本町二十九番地

印刷所

共益商社印刷部

芝區宮本町二十九番地



目録

第一章 緒言

第二章 基礎理論

第三章 實驗方法

第四章 實驗結果

第五章 結論

